**№7　テーマ『人生の鉄則』**

**講話日2002年2月18日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：今日は本当にお忙しいところ、ありがとうございます。もう何回かお話をさせていただいてるんですけども、今日の話は人生の鉄則という話で、これはどういう仕事をする場合でも、どういう生き方をする場合でも、この原則を外しては、絶対に人生に成功はないという、そういう意味では、生き方の根本原理というようなもんですね。そのことを今日は、お話をさせてもらいたいと思います。全部で５項目あります。レジュメに書いていただいてありますけど、この５項目がですね、どういうことをする場合でも、自分の意識の中にこのことを置いておかないとですね、ついつい軌道から外れてしまうということになりやすい。その意味で、ぜひ、これはすべて実践的原理ですので、観念的なものじゃなくて、このことをしなければ、本当にこう、自分の納得のできるですね、自己実現の人生、成功の人生、幸せな人生というものはつくり得ないという、そういうことであります。どんなに努力しておっても、この原則を外して努力しておったんでは、着実な幸せの階段をですね、上り詰めることはできません。そんな意味で、ぜひ、よく聞いてもらいたいと思います。**

**まず第１番目は、自信と謙虚さというふうに書いてありますけども、とにかく人生の舞台、仕事の舞台は社会です。そして、社会の中で一番要求されるのは、他人から信頼され、信用されることです。しかし、どんだけ他人から信頼され、信用されるということがあってもですね、それに慢心してしまっては、人生はやはり崩れます。もう１つ、そういう、この他人から信頼され、信用されるということと同様に大事なのは、自らの、自分で自分を律するという意味での謙虚さですね。傲慢であってはならないという、謙虚さというものが常にその裏に付いていなければならない。自信と謙虚さというものは一対のものとして、いつも自分の中で自覚されている。それがまず、人生を生きる生き方の基本であります。**

**そこで、まずこの自信をどうつくるかという話からさせてもらいたいと思うんですけども、とにかく社会において一番要求されるものは、他人から信頼され、信用されることである。それなしには、いかなる仕事も成功し得ない。いかなる人間関係も破綻する。他人から信頼され、信用されるという、そういう条件を自分の中にどう整えるかということを、まずわれわれは考えなければなりません。他人から信頼され、信用されるために、自分が努力して、自らにつくらなければならないものは自信である。自信というのは、自分で自分を信ずると書く。自信というのは、自分の命からこう、湧いてくるものですね。そういう自信が、自らの命からこう、じしーんとこう、湧いてくるような、そういう状況に自分を持っていくためにはどうするかということですね。そのためには、まずは自信をつくるためには、信じるに足る自己をつくる。信じるに足る自己をつくるという努力をしなければならない。自分で自分が信じられないような人間を誰が信じてくれるんだということですね。自分で自分が信じられないような人間を誰が信じてくれるんだ。自分で自分を信じることができる。そういう内容を自分の中に蓄積していくこと。積み重ねていくこと。それが自信の原理であり、もっと他人から信頼され、信用されるということになる条件であります。**

**じゃあ、どうすれば、自分で自分が信じられるという、そういうものを自分の中に積み重ねていくことができるのか。自信をつくるためにはどうしたらよいのか。信ずるに足る自己をつくるっちゅうことは、少し古い言葉遣いですからね。若い方々は、その言葉を聞いてすぐ書けないと思いますので、ちょっと書いてみますと、ここ、書いてよろしいですか。**

**Ａ：はい、どうぞ。**

**芳村：信じるに足る自己をつくると書くんですよね。信じるに足る自己をつくるということをするためにはどうすればよいのか。すなわち、人間的自信ですね。人間としての自信。人間的自信というものが、命からこう、じしーんと湧いてくるという、そういうふうな、この構造に持っていくためにはどうしたらよいのか。それを考えるためには、まずは、学問的には、人間というのものは、理性、感性、肉体という３つの要素から人間は成り立っておる。人間と命は、理性と感性と肉体という３つの要素の有機的な連関性から生まれてくる相乗効果。それが人間という命の実体である。そういうことを考えれば、われわれは自信をつくるためには、理性という観点から自信をつくるためにはどうするか。また、感性という観点から自信をつくるためにはどうするか。肉体という観点と申しましょうか、ところてんと申しましょうか、この肉体という観点から、この自信をつくるためにはどうするか。この３つの、自信をつくる原理というものを考えて、その相乗効果として人間的自信が湧いてくるという、そういう構造になっておるのが人間の命であります。理性という観点から自信をつくる原理、感性という観点から自信をつくる原理、そして、肉体という観点から自信をつくる原理。この３つの、この原理を踏まえながら、人間的自信というものをつくっていくということを考えなければならないと。**

**じゃあ、理性という観点から自信をつくるためにはどうするか。理性という観点から、社会を生き抜く自信というものをつくっていこうと思ったならば、何が大事なのかといったら、これは自分が今、やっておる仕事、今、自分がやっておる仕事に関わる学問的知識を求めていかなければならない。今、自分がやっている仕事に関わる学問的知識と技術をとことん求めていく。これが、この理性という観点から、社会を生き抜く、現実を生き抜く自信をつくっていく原理であります。どうして学問的知識ということを言うのかといったら、学問的知識というものは、これはその時代に生きる人間であるならば、誰もがそうだと認めなければならないという根拠が与えられておるものが学問的知識です。そういう誰もがそうだと認めなければならないという根拠が与えられてるものを自分がどれだけたくさん持っておるか。これはもう、言うまでもなく、社会を生き抜く、社会において絶大な信頼と信用を獲得することができる基礎になるわけですね。**

**だけども、残念ながら、学校から、社会に出てしまうと、その学問的知識の吸収に努力をすることを忘れてしまって、ついつい、自分の体験、経験にのみのっとって、体験、経験にのみのっとった仕事をしてしまう。体験、経験というのは自分だけのものですからね、だから、そういう仕事の仕方をしたのでは個の限界は超えられない。すなわち、他人からの絶対の信頼、信用というものを獲得するということが、不可能とは言いませんけども、ついつい、おろそかになってしまう。自分の経験だけにのっとって仕事をすれば、それは自己満足の世界だ。他人から信頼され、信用されるためには、誰もがそうだと認めなければならないようなものを、どれだけ自分が持っておるか。その意味で、学問的知識というものは、まさにその条件を満たすものである。そして、自分が体験、経験によって獲得した自信というものを、さらに学問的知識や技術によって根拠付ける。そのことによって、誰も納得させることができる。誰も説得することができる。そういう強烈な自信が、命から湧いてくるわけであります。決して、実業人は、体験、経験のみにのっとった自信の上に仕事をしてはならない。その自分の体験、経験から出てくる自信を学問的根拠によって根拠づける。学問的知識の上に自分の体験、経験を立脚せしめる。そういう意識は非常に大事であります。**

**ですから、発展、成長する会社は、必ず研究所をつくりますし、研究所を持っておりますし、なんらかのかたちで、その地域にある大学との、連携というものを忘れません。常に何かしら、学問的な知識の研究との連携の中で、今、自分の仕事を発展させていこう。そういう意識で努力する会社だけが時代の要請に応え続けて、またその未来を的確につかみ取りながら、現実を生き抜いていくという力を持つことができるわけであります。体験、経験のみにのっとった仕事というものは、個の限界を超えられない。自己満足の世界である。自分で正しいと思っておっても、他人を納得させる力が湧いてこない。やっぱり、他人に十分、納得してもらうためには、誰もがそうだと認めなければならない。そういう根拠をちゃんと持っておる学問的な知識や技術を獲得しなければならない。**

**その意味で、最近は産学協同といって、実業界における企業が大学の研究者と、連携をしながら、いろんな仕事をしていくということがなされておるわけであります。べつに研究所をつくらなければならないということはないんですけども、とにかくなんらかの意味で学問的世界と関わりを持ちながら、仕事をしているという、そういう状態が実業人においては自分を成長させるために、会社を発展させるために、また本当に、社会から、他人から信頼され、信用されるという仕事をするためにどうしても要求される条件であります。ぜひ、その自分の今やってる仕事に関わる、学問的知識を吸収することに関心を持ってもらいたい。それが社会を生き抜く自信というものを自分の中に積み重ねていくという、そういうことになります。直接的に、結果として何かしら、信頼、信用されるということはなくっても、自分の中から自信があふれてくるんですね。顔つきが違ってくる。学問的な根拠を持って仕事をしとる人間は顔つきが違ってくる。誰もがそうだと認めなければならないと、根拠を与えられておるものを自分の中に持てば、何かしら社会において、相手に自分を認めさせるという、そういう相手が認めざるを得なくなるようなね、そういう雰囲気が、その人間の人格から漂ってくるわけであります。往々にして、多くの方々が、社会に出ると、体験、経験にのっとった仕事しかしてない。だから、なかなか伸びないですね。個の限界を超えませんからね、それは。体験、経験は個人的なもんですから。ぜひ、そういう意味で、学問との関わりというものを一生なくしてはならない。企業というものは、その地域に存在する大学の、自分の仕事に関わる学科との関係性を一生なくしてはならない。それは非常に大事な、企業の存続、発展、成長の原理であります。**

**それから、２番目の感性という観点から自信をつくる原理はなんなのか。この感性というのは、これは感じ取る力というふうに言うことができるものですけども、感性というのは、これは人間だけが持っておるのではない。人間も動物も植物も、単細胞生物のアメーバやゾウリムシでも、感性というものを持って生きておる。だけども、他の動植物の感性と人間の感性とは違う。人間の感性というのは、理性という能力を持つようになった命における感性である。理性という能力を持つようになるところまで命が進化した、そういう次元における感性。そういう感性をなんというか、その人間の感性は心と呼ばれる。心。心というのは、どういう感性かというと、心というのは、意味と価値を感じる感性である。意味を感じなければ、人間はやる気にならない。価値を感じて、素晴らしさを感じなければ、命は燃えないんだ。人間の心は意味と価値を感じる感性である。この意味と価値を感じる感性である心というものを、原理にしながら、現実を生き抜く自信というものをつくるということはいったいどういうことなのかというと、人間は最高に意味を感じ、最高に価値を感じたならばどうなるかといったら、人間は最高に意味や価値を感じたら、必ず、もうこのためだったら、俺は死んでもええなと、こう思うんですよね。死んでもいいというぐらいの気持ちが出てくる。**

**最高に素晴らしいなと思ったら、あるものに対して、本当にその意味と価値と値打ちの素晴らしさというのを感じたならばね、人間、必ず、もう俺はこのためにだったら死んでもいいという、そういう思いが出てくる。恋愛でも、最高に燃えたときっていうのは本当にそうですからね。もう俺はこいつのためにやったら、死んでもええなと思うときが一番、恋愛において燃えたときですもんね。人間の命が最高に燃えれば、必ず死んでもいいという実感が出てくる。そういう、人間の心というものを原理にして、人生を生き抜く、社会を生き抜く、現実を生き抜く自信をつくるとはどういうことなのかといったら、この自分の生き方を支える信念をつくる。自分の生き方を支える信念のことをMy Philosophy、これが俺の哲学だというんですよね。自分の生き方を支える信念。それがいわゆるMy Philosophyである。これが俺の哲学だという。感性という観点から人生を生き抜く自信というものをつくろうと思ったならば、自分の生き方を支える信念というものをつくらなければならない。**

**ところが、信念というものは、これは動じないのが信念であって、動揺してるあいだは、それは信念ではない。信念とは動じてはならない。動揺してはならない。誰がどう言ったって、俺はこれでいいんだ。そういう自信がね、信念ですからね。そういう誰がどう言ったってびくともしない。動じない。そういう自分、そういう信念というものを自分が持とうと思ったら、何が大事なのか。そのためには、なんらかの意味で、俺はこのためにだったら、死んでもいいというものを持たないと、本当にこの動じない自信、本当のこの信念というものは生まれないんですね。信念というのは、動じるようでは信念ではない。動揺するようでは信念ではない。本当の信念というのは、この死んでもいいと思えるものを持たないと、信念はできない。死にうるものとの出会い。俺はこのためにだったら、死んでもいい。俺はこのために生きて、このために死ねたら本望だ。そう言えるものを持って初めて信念は固まるわけであります。死にうるものを持たなければ、信念は固まらない。まだ動揺する可能性がある。**

**ちょうど役者さんが、舞台の上で死ねたら本望だという、それと同じ思いを今、自分がプロとしてやってる仕事に持っとるかどうか。俺はこの仕事のために生きて、この仕事をして、この仕事をしながら死ねたら、もうなんにも言うことはないと。最高の幸せだ。そういうふうに言えるか。その思いがどの程度かによって、その人間はどの程度の成功を人生において勝ち取れるかが決定するんですね。結局、人生というのは、今やっておる、今、自分がしておることにどれだけの情熱を注ぎ込んでるかによって、自分の成功度合いが確実に決まってしまいます。その程度にしか仕事はできませんからね。どの程度の意味や価値をその仕事に感じてるか。それがどの程度の仕事ができるか。どの程度の仕事ができる人間なのかを決定するわけであります。そして、最高に人間が意味や価値を感じればね、誰でも死んでもいいという心情が出てきます。プロとして仕事をしていながら、まだその仕事に死んでもいいという気持ちが出てこない。それは今、自分がやってる仕事の本当の素晴らしさ、本当の値打ちをまだ感じてないんですね。感じてないと命は燃えませんからね。頭で知ってるだけじゃ、これは観念ですから。冷たいもんですから。俺は死んでもいいなんていうような気持ち、絶対出てきません。感じたら燃えます。本当に恋愛でもほれたら死ねますからね。死んでもいいという気持ちが出てきますからね。**

**人間が本当に、今、自分のやってる仕事に意味と価値と値打ちと素晴らしさというものを感じて、この仕事をせんことには、この醍醐味はつかめんぞ、この醍醐味はわからんぞというものをつかんだら、人間、誰でも死んでもいいという気持ちが出てくるんですね。そういう人間はどういうことを言うかといったら、本当に今、自分のやってる仕事の醍醐味をつかんだ人間というのは、どう言うかといったら、ほかにもいっぱい、いい仕事はあるかもしらん。だけど、俺にとっては、この仕事以上に素晴らしい仕事はありませんと、こう言い切れるんですね。ほかにもいっぱい、いい仕事あるかもしらん。だけど、俺にとっては、この仕事が最高なんやとこう言えるわけですね。それがその仕事の醍醐味を知った、本当のプロの言葉であります。プロというのは、本当のプロというのは、その仕事の本当の値打ちを、本当の醍醐味をつかんだ人間だ。感じた人間だ。頭で知ってるだけじゃ、まだそれは本物じゃない。命が感じないと、本物にはならない。**

**そして、人間はそういう死んでもいいと思えるものに出合ったとき、誰がどう言ったってこれでいいというね、そういう自信が湧いてくるわけであります。それが他人に魅力を感じさせる。また、それが人生を生き抜く自信ということですね。どんなことがあったってくじけない、崩れない。そういうこの力強さが、そこから湧いてくるわけであります。どんな困難でも乗り越えていく。やっぱり、この意味と価値と値打ちと素晴らしさというものを感じるということが、人間的な人生を生き切る根幹なんで、人間の本質は心ですからね。心は意味と価値を感じるもんだ。意味と価値を感じなければ、人間らしい気持ちというのは出てこない。最高に意味と価値を感じたら、人間は死んでもいいという気持ちになれる。どんな仕事にも、他の仕事に置き換えがたい、値打ち、意味、素晴らしさというものをみんな持っておるんだ。それをつかまなければ、本当にプロと言えない。それをつかまなければ、お客さんに接するなんて申し訳ないと思わんといかんと。半端な気持ちでね、生半可なことしかしとらん人間が、お客さんに本当の心を込めたサービスができるか。やっぱり、本当の今、自分のやってる仕事の素晴らしさというものを感じて、そして、その意味と価値と値打ちと素晴らしさをお客さんに伝えて初めて仕事だと。理想を言うならばそういうことですね。**

**自分の命が燃えずして、どうして相手に素晴らしさを感じさせられるんだ。金がもらえる仕事というのは、そこまでいかんにゃいかんと。感性というのは感じる力ですからね。意味も感じるもの、価値も感じるもの、問題も感じるもの、感謝も感じるもの、恩も感じるもの、責任感も感じるもの。勇気も感性から湧いてくる。人間的なものは全部、感性から湧いてくる、感性から出てくる。そういうものを持って初めて、われわれは人間としての自信というものを、自分のものにすることができるわけであります。まあ、とにかく、この感性という観点から、自分の生き方を支える信念、これが俺の哲学だと、こう言える、そういう自分の生き方を支える信念というのをつくろうと思ったら、われわれはなんらかの意味で、このためにだったら、俺は死んでもいい。俺はこのために生きて、このために死ねたら本望だ。まあ、そういうふうに言えるものを持ったとき、人間は自分が自分で信じられる。絶対の自信というものが、湧いてくるという、まあ、そういう自分というものをつくることができるわけであります。**

**死にうるものとの出会い。死んでもいいと思えるものと出合うこと。それが最高の人生だ。まだ死んでもいいと思えないのは、本当の素晴らしさがわかってない。本当の素晴らしさを感じてない。本当の意味と価値と値打ちを知らんということですね。人間、本当の意味と価値と値打ちと素晴らしさというものを感じたら、誰でも、どんな仕事でも、死んでもいいという実感が出てくる。例えば、ごみを拾うというね、仕事なんかでもですね、もうそんな仕事はそう大した値打ちのない仕事だと思ってるかもしれませんけど、だけど、ごみを拾うということを仕事にしてる人でも、俺はただごみを拾ったんじゃないぞと。俺はごみを拾いながら、おまえら、威張って歩いとる人間たちの心の掃除をしてやってんだぞという思いでね、ごみを拾うならば、人間の心の掃除をしてる。どういうふうに、その自分のやってることを意味付けるか、価値付けるかによってね、その素晴らしさを感じたならば、ごみを拾うという行為のためにだって、人間は命を懸けられるんだ。どういうふうに今、自分のやってる仕事を解釈するかですね。意味付けるか、理解するか。どういう思いをその仕事に持つかですね。それがその仕事のために死ねるか、死に切れないか、半端な気持ちで関わるかどうかを、決定するわけであります。**

**どんな仕事でも、自分のその関わり方によっては、どんな仕事でも、死んでもいいと思えるほどの意味と価値と値打ちと素晴らしさというものをつかみ取れるんだ。またつくりだせるんだ。自分の情熱によってですね。それが、感性という観点から、人生を生き抜く自信というものをつくっていく原理である。人間の心は意味と価値を感じる感性だ。今、自分のやってる仕事に意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じる。それができなかったならば、あらゆることは人間としては半端になってしまう。本当の情熱は湧いてこない。本当には打ち込めない。とにかく死にうるものとの出会い。死んでもいいと思えるものを持ったとき、命は最高の人生を味わうのである。恋愛でも、この人のためだったら死んでもいいと思ったとき、自分は最高の幸せなんですからね。それが最高ということなんだ。**

**３番目は肉体ですね。肉体という観点から、肉体という観点と申しましょうか、ところてんと申しましょうか、とにかく肉体という観点からこの人生を生き抜く自信というものを、つくっていこうと思ったらどうするか。肉体というものが持っておる価値はいったいなんなのか。それは体験ですね。体験というのはこれ、やった人間しかわからんぞというものを与えてくれるんですね。おまえはやってないやろう、俺やったんやといったら、もう何も相手は言えませんからね。やってない人間、何も言えない。やったんやという人間にはかなわない。やった人間の言うことには、反発、反論できない。これほどの強みはないんですよね。肉体というものが持っておる価値は体験だ。体験というものは、やった人間しかわからんというものを与えてくれる。これほど絶大な、自信の基礎はない。肉体という観点から考えるならば、人生にはマイナスはないわけですよ。どんなことでも全部、やった人間しかわからんというのを自分に与えてくれるんだ。病気になった人間にしか、病気になった人間の本当の気持ちはわからん。泥棒した人間にしか、泥棒する人間の本当の気持ちはつかめん。人を殺した人間にしか、人を殺した人間の本当の悲しさ、つらさというものはわからない。人間は体験の数だけ人間への理解を深めていく。人間は体験の数だけ自分の人間への理解の幅を広げていく。体験こそ、まさにあらゆるものへの理解の深さと幅をつくるのである。体験のない人間は、本当のことは言えない。本当のことは語れない。体験のない言葉には魂がない。単なる観念だ。知識だ。やって初めて本当のことがつかめる。体験というのは、どんな体験でも、自分を成長させてくれる。やった人間しかわからんというのを与えてくれるんですからね。**

**だから、結婚だけして、離婚してない人間は半分、人生の半分しか知らん。結婚して離婚して初めて、人生の全体を知ったと言える。離婚しても、決してそれはマイナスではない。それも体験だ。離婚した人間の本当の気持ちは、離婚した人間にしかわかってあげられない。どんなことがあったって、人生にマイナスはないんだ。体験にはマイナスがない。全部プラスだ。どんなことがあっても、人生は諦めたらいかん。絶望したらいかん。人間は体験の数だけ成長するんだ。人間は体験の数だけ、物事への理解を深めていくし、人間は体験の数だけ、人間性の幅、人間性の幅を、広げていくことができる。何があったって、人生は大丈夫なんだ。それが体験の価値ですね。これほど人間にとって絶大な自信の基礎になるものはないんですよね。どんなことがあったって、人生は諦めたらいかん。絶望したらいかん。自分の体験の数だけ成長するんだ。全部が積み重ねだ。だから、人生には失敗の人生なんてあり得ない。全部の人間の人生は大成功の人生だ。毎日毎日、新しい体験が付け加わるんですからね。毎日毎日、とにかく成長してるんだ。もう本当にもう、朝起きたら、また今日も体験しちゃうと。もう本当、困っちゃうなというぐらい、成長してしまったりなんかして、もう絶対、崩れようがないのが人生だ。それが体験というものがつくりだす自信の意味なんですね。どんなことでも、全部それがプラスになるんだ。やった値打ちはわからんというものを与えてくれる。これほど人間的自信の、基礎になるものはない。**

**この会社に入ってきて、その仕事をした人間にしか、その値打ち、その素晴らしさ、その意味を、本当には語ることができない。あらゆるものは全部積み重ねだ。全部、あらゆるものを積み重ねとして、この自分が理解するところに自分の崩れない人生というものがある。これはマイナスだ、嫌だなと思った瞬間に自分の人生が崩れ去る。マイナスだと思ったら、自分が不幸になる。プラスだと思ったら、自分は幸せになる。あらゆる事柄を、自分の人生のプラスになるように解釈し抜く力、それが自分を幸せにしていくんですね。よく世間では、こんな女に誰がしたと申しますけど、環境がこうだったから、私はこうなっちゃったのよって、これは環境に負けて、環境をマイナスだと意識してしまった人間の哀れさですね。出来事というものには、必ずどんなマイナスに見えるものでも、必ず出来事というものにはプラスの面がある。どんな大不況にもね、その大不況でなかったら、こんなことはできないというね、そのプラス面がある。あらゆる事柄は全部、マイナス面とプラス面を半分ずつ持ってるんだ。マイナス面に気を奪われてはならない。必ずプラス面が半分ある。だから、あらゆる出来事を、あらゆる環境を自分の人生にプラスになるように解釈をし抜く力。あらゆる出来事を自分の人生にプラスになるように受け止めていく力を持つことが、自分を幸せにする力であり、幸せをつくっていく実力を獲得する方法論である。あらゆるものを自分にとってプラスになるように解釈する力。それが自分を幸せにする。それが自分を成功に導いていく。マイナスだと思った瞬間に自分の幸せは崩壊する。自信がなくなる。**

**エジソンさんがね、なんであんな大発明家になったのか。あれは失敗というものをね、普通の人間は失敗が連続すると、だんだん自信がなくなるんですよね。もう駄目やなと思ってしまうんですね。だけど、エジソンさんは反対なんだ。失敗すればするほど、一歩一歩、成功へ近づいてると思うんですね。失敗の連続は成功への確率を増やすという信念を持った。だから、もう一歩一歩、成功に近づいてるということが失敗するということなんだから、もうちょっとで成功かもしれん。もうちょっとで成功かもしれんと思うから、ここでやめたらもったいないと思ってしまったりして、やめられなくなってしまって、もうどうにも止まらないで、リンダ状態で突っ走ってしまって、成功するまでやっちゃったので、いろんな発明ができたんですね。もうかっぱえびせん状態になったんですよ。**

**ところが、普通の人間は、失敗で、失敗で、失敗でと、失敗が連続すると、だんだん、だんだん、自信がなくなっていってね、もう俺は駄目やなと思ってしまうんですね。それが普通の人間。いわゆる現象をマイナスに解釈するんだ。だから、あらゆる事柄をプラスに解釈する人間だけが人生の成功を最後に獲得する。つかみ取る。失敗した人間は途中でやめた人間なんだ。成功した人間は、ただ単に成功するまでやっただけなんだ。だけど、なんで成功するまで頑張れたのか。なんで途中でやめるのか。それだけが人生の問題だ。失敗という現象に対する解釈ですね。それをマイナスだと評価するか、それをプラスだと評価するかによってね、自分の人生が180度違ってしまう。それが解釈力なんですよ。その事実から、その体験から何をつかみ取るかですね。同じことを体験しても、その人の技術や能力のレベルと、人間性のレベルと人格のレベルによって、同じことを体験しても、そこから何をつかみ取るかは違ってくる。成功する人間というのは、必ずどんなことからもね、自分の人生にプラスになるものをつかみ取っていったんだ。それが成功する人生、それが積み重ね、絶対崩れないというね、成功する人生へのステップを歩ませてくれるんだ。どんなことにも必ずプラス面がある。また必ずマイナス面がある。マイナス面に気を奪われてはならない。そのものが持っとるプラス面をつかんで、自分の人生に積み重ねていく。それが人生の生き方の基本だ。**

**とにかく体験というものは、やった人間にしかわからんというものを自分に与えてくれる。毎日毎日が成功、毎日毎日が成長の積み重ねなんだ。絶対に人生は体験ということからいったら、崩れようがない。もう成功、成長するっきゃないというのがね、人生だ。体験からいったら、毎日毎日、積み重ねなんですからね。もう成功するっきゃないんですよ。本当にわれわれが、そういう意味でね、積み重ねの人生、絶対崩れようのない、積み重ねの人生というものを歩んでいこうと思ったならば、われわれはどういう自覚を持って、今日一日を生きるべきであるか。それは今日、自分が24時間を生きた意味がどこにあるのか。今日一日を生きた証、今日一日を生きた証というものをね、積み重ねながら生きるということが、崩れようのない人生をつくっていく基本中の基本である。毎日毎日が惰性に流されてはならない。今日一日を自分が生き切って、いろんなことを体験した。今日、自分がいろんなことを体験して、体験した中で、どれが今日一日を生き切った価値というものを、自分に与えてくれる体験なのか。それを毎日毎日、１つずつ積み重ねていったならば、１年間で365段階を自分が登ることができる。あっという間にすごい成長を遂げる。今日は昨日と同じ今日であってはならない。明日は今日と同じ明日であってはならない。毎日毎日が積み重ねだ。そういう意識でね、今日一日を生きた証というものを積み重ねながら、先ほどの久保川社長のあの手帳のように、毎日毎日、何かしら積み重ねとしての言葉を書いてある。毎日毎日が充実した意味の連続だ。それが限りないね、偉大な人間をつくるわけであります。今日一日を生きた自分の命のノートに１文字も書いてない。なんの意味もなかったと。これは惰性ですね。どんなに長く仕事をしておってもね、惰性に流されては成長はない。積み重ねていかなければ成長はない。人生は積み重ねだ。**

**以前、私がつくった言葉が、サントリーのウイスキーのコマーシャルに使われまして、どういう言葉がといったら、時間は流れない。それは積み重なる。時間は流れない。それは積み重なるという言葉がね、サントリーウイスキーの熟成、ウイスキーが熟成していくということを表現するためにそれが使われて、テレビコマーシャルに流れたんですよね。サントリーウイスキーといって、時間は流れない。それは積み重なる。時間というのはなんなのかといったら、それは空間の積み重ねなんですよね。時間というのは空間の中に積み重ねられていく。空間というのは、積み重ねられた時間なんだ。だから、過去というものは流れ去ったものではない。過去は現実だ。あらゆる過去は現実の空間から掘り起こされるのである。過去は現実の中にある。過去は現実の空間の中にある。だから、時間は積み重なるんだ。こういう解釈はね、私の感性の哲学が初めて成し遂げた解釈なんですよ。時間は空間の本質であり、空間は時間の現実態である。空間とはまさに時間の堆積だ。だから、時間は流れない。時間は積み重なる。その自覚が人生を成長のプロセスとさせるのだ。時間を積み重ねていく。だから、われわれは今日一日を生きた証というものをね、自分の命の中に積み重ねていかなければならない。それが成長ということだ。今日一日を生きた証がなんなのか。それを先ほどの久保川社長の手帳のようにね、毎日毎日、積み重ねていく。そうすれば、自分が驚くほどのね、気付きの成長を遂げることができるわけであります。**

**今日、こうやって話を、聞いていただくこの３時間の間に何をつかんだか。いくつ、つかんだか。どれほどの価値のあるものをつかんだか。自分がその話に感じた価値の、度合い。素晴らしいなと思った度合いが自分の成長なんですからね。こうやって話を聞いても、なんだ、つまんねえなと思ってたら、これは全然、自分は成長しませんよね。だから、すごいなと思うことがあったら、ぐんと自分はいっぺんに成長するわけですよ。自分のつかみ取り方いかんでね、自分の成長度合いが決まってしまう。その問題意識を持っておったら、何かしら問題意識というのを持っておったら、どんな話を聞いてもね、何かしらこう、ヒントになるというか、自分の参考になるものがこう、つかめるもんなんですよね。だけど、なんの問題意識もなく話を聞いておったら、ただただ右から入ってきて、左にこう抜けていくみたいな感じで、ふわっと終わってしまうんですね。**

**問題意識というのは吸収する力ですからね。なんでやろうなとかね、なんかこう、人間にとって真実の愛とはなんだろうなとかね、人間にとって本当の勇気とはなんだろうかなとかね、人間にとって本当の正しさとはなんだろうか、人間の本当の美しさってなんだろうか。そういう強烈な問い掛けをね、自分が持って仕事をしておったら、持って本を読んだら、漫然と本を読んでるのとは全然違う気付きがどんどん飛び込んでくるわけですね。今まで目に留まらなかった言葉が、どんどん自分の心に飛び込んでくる。それが成長なんですね。とにかく、肉体というものが持っておる人生の価値は体験だ。体験というのは、やった人間しかわからんというものを自分に与えてくれる。おまえ、やってないやろう。俺、やったんや。もうこれほど強いものはない。それが自信だ。体験の積み重ね、それが人間に自信を与えてくれる。もうとにかく、人間というのは、理性、感性、肉体という３つの要素の有機的相乗効果として自分というものがある。だから、理性という観点から自信をつくるためにはどうするか。感性という観点から自信をつくるためにはどうするか。肉体という観点から自信をつくるためにはどうするかということを考えて、そして、その相乗効果として、自分の自信、人間的自信というのが湧いてくる。そういうふうに、考える。それが学問的な、自信というものに対する理解、解釈であります。**

**そういうふうにして、人間の自信というものは湧いてくるという力がこう、芽生えてくるんですけども、だけど、どんなに自信があってもね、自信だけでは本当の信頼、信用が獲得できない。自信には必ず、その裏に謙虚さというものが付いてないといかん。ついつい自信があると、舞い上がってしまって、自信過剰になってしまって、そして、この自分の自信を相手に押し付けて、嫌がられてしまって、ということになってしまって、かえって信頼をなくしてしまうということがある。自信の裏には必ず謙虚さがなければならない。また謙虚さの裏には必ず自信がなければならない。自信と謙虚さは一体のものとして存在しなければ価値がないんだ。自信ばかりでは他人に煙たがられてしまう。謙虚さばっかりじゃ、弱さになってしまう。謙虚さというのは人間らしい心の象徴だけども、この謙虚さだけでは人間ではない。自信のない人間の謙虚さというのは、これは弱さの表現でね、弱い人間が謙虚にすると、こびへつらえに見えてしまう。どんなに謙虚にしても価値が出てこない。強い人間が謙虚にするとね、あんなに強いのになんて謙虚な方なんでしょうなんていうようなこと言って、尊敬されてしまうと。能力のある人間が、自信のある人間が謙虚にすると、あんなにすごい能力を持ってるのに、なんて謙虚な方なんでしょうって尊敬される。**

**だけど、強くなければ、自信がなければ、力がなければね、謙虚にしたって、全然、価値がない。能力ないんやから、謙虚なんて当たり前やないかと。弱いんやから、それは謙虚やわなと。全然、評価されない。強さがあって、自信があって、力があって、初めて謙虚さというものもね、人間的な素晴らしさとなって評価される。人間が、人間的なこの人生というものを、この生きていこうと思ったならば、常に自信と謙虚さ、強さと謙虚さと、これ一対のものを、求めていかなければならない。謙虚さというのは、強さと自信に光を与えるものだ。どんなに謙虚さが人間的に大事でもね、謙虚、謙虚、謙虚、謙虚って言ってたんじゃ、これはなんか、鳥が鳴いてるみたいですからね。謙虚さというのは、自信があって、強さがあって、初めて価値を持ってくる。弱い人間の謙虚さは、こびへつらえに見える。自信のない人間の謙虚さは弱さの表現だ。価値がない。**

**じゃあ、どういうふうにすれば、謙虚さというものをつくっていくことができるのか。自信というものと一対のものとして、傲慢であってはならない。傲慢になってはならないという、そういう謙虚さをどうしたらできるのか。人間的なその謙虚さというのは、謙虚にしなくっちゃという意識では駄目なんですよね。人間的な謙虚さというのは、傲慢であってはならないという意識でないといかんと。傲慢になったらいかん。傲慢になったら、人間は人間であることを根底から失格する。それはなぜかといったら、それは人間はどんな人間でも不完全である。不完全であるから、人間は傲慢になってしまったら、人間は人間であることを根底から失格する。だけど、謙虚ということをあまり強く意識すると、ついつい控えめになってしまったりなんかして、強く自分を押し出せない。自信をつくっていくことに対して消極的になってしまう。だから、謙虚ということよりも、人間的に大事なのは傲慢であってはならないと。傲慢であったらいかんと。傲慢になってはならないという、この戒めが、自分で自分を律する力として大事なのであります。傲慢であってはならない。傲慢な目をしてはならない。傲慢な表情をしてはならない。傲慢な態度を取ってはならない。それは醜いもんだ。人間としては醜いもんだ。傲慢であったらいかん。その戒めを、われわれは常に忘れてはならない。**

**だけど、そういう傲慢にならない、傲慢であってはならないという、そういう気持ちが、このにじみ出てくるという、そういう人間性になるためにはどうするか。まず、われわれは、自分の考えというものに自分が自信を持つと、どうしてもこう、相手を説得したり、何か自分の考えを相手に押し付けるというようなことになりやすいんですね。それは近代何百年間か、理性というものが人間の本質だと考えて、そして、理性を間違いなく使うならば、誰もがそうだと認めなければならないような、絶対的に正しい回答に到達できる。真理は１つだ。最終的にはみんなが同じ考え方にならにゃいかん。理性を正しく使うならばね、みんながそうだと認めなければならないような、絶対的に正しい真理に到達できるんだ。そういうふうな、核心をつくったもんですから、近代は。だから、自分が正しいと思うと、どうしても自分の考えを相手に押し付けてしまいやすいんですね。それが傲慢さなんだと。**

**だけども、理性というのは、どういう能力かといったら、理性は確かに合理的に考えることができる素晴らしい能力だ。だけども、残念ながら、理性は合理的にしか考えることができないという限界がある。理性は合理的にしか考えることができない能力である。そういう、理性の限界というものをまずちゃんとわれわれは知っていなければならない。自分がどんなに正しいと思っても、その正しさは、決して絶対ではない。完全ではない。不完全である。有限である。そういうことをどれだけ、自分が心にちゃんとこう抱いておるかによって、自信はあっても傲慢にならないという気持ちが湧いてくる根拠になるわけであります。**

**なんで合理的にしか考えることができないという理性を、有限で不完全というふうに言わなきゃならんのかといったら、人間がイコール理性であったならば、理性さえあったならば、人間のことはどんなことでも全部、解決できる。だけど、人間はイコール理性ではない。人間は理性と感性と肉体という、この３つのものが有機的に絡み合って人間という命をつくっておる。だから、人間が理性的になってしまったら、人間性は破壊されるんだ。人間はイコール理性ではない。理性能力だけでは人間の問題は解決できない。感性も理屈を超えておる。肉体も理屈を超えたもんだ。だから、理屈だけでは人間の事柄はさばけない。また現実社会も、合理的なものだけでできておるのではない。現実社会も合理的なものと合理的ではないものが絡み合って現実をつくっておる。もちろん、現実の中には、合理的につくられたものもある。だから、ある程度、理性によって対応できる。だけども、合理的にだけできておるのではなくって、現実社会には合理的ではないものがいっぱいある。感情も、欲望も、本能も、愛も、さまざまなものが、現実においては働いとって、決して合理的にさばけるものだけが現実にあるのではない。だから、ある程度、理性でも対応できるけども、決して現実の社会の問題は理性だけではさばき切れないという、そういうところがある。表面的には理性で解決できたように見えても、根の深いところには理屈を越えた、厄介なものがくすぶり続けておって、なかなか問題はなくならないということになりやすい。**

**子どもがね、うそを言った場合でも、ついつい、お父さん、お母さんは、うそを言っちゃ駄目じゃないのって注意するんですよね。だけども、そう言われると、子どもの心はどうなるかっていったらね、そんなことはわかっとるわと。うそを言っちゃいかんぐらいはわかっとると。なんでお父さん、お母さんは、この俺のつらさ、俺の苦しさ、俺の悲しさがわかってくれへんのっていう心が残ってしまう。理屈を超えてね、うそを言う人間のつらさがわからないと、人間の心地はさばけない。人間の人生はわからない。罪を犯した人間を裁判で裁いて、本当のことはわからない。罪を犯した人間よりも、加害者よりも、被害者で殺された人間のほうが悪い場合が多いんだ。殺す人間のほうが善良であって、殺された人間のほうが悪い場合が多い。いや、罪を犯したくって、人間は罪を犯すんじゃない。罪を犯さざるを得ないよう状況に追い詰められて、心ならずも罪を犯してしまう。その罪を犯す人間の悲しさ、つらさがわからんようでは、人間というのは見えてこない。理屈を超えた世界がより深いところにあるんだ。表面的に善だ悪だと言ってる分には、これはもう上っ面だけの人生だ。人間というものを本当に理解しよう、本当にお客さんと関わろうと思ったならば、心の中を感じ合わなければならない。相手の心が見えてこなければ、本当にはものは売れない。人間への深い理解が、商売の根幹だ。理屈では人間は動かん。心の共心、共鳴、共感し、心が触れ合う、共鳴し合う。そういうことが、このあらゆることがうまくいくか、いかないかを決定するのである。**

**とにかく理性という能力は、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。それは理性に対するマイナスの解釈なんですね。だけども、理性に対するプラスの解釈はなんなのかといったら、理性はよりよいことを考えることができる能力だ。理性は、絶対こうだということは言うことはできない。だけども、理性はよりよいことを考えることができる能力である。それはなんでかといったら、理性はうそを言うことができる。うそを言うということは、事実ではないことを言うことができる。理性は、本当のことも言うこともできるけども、うそも言うこともできる。うそを言うということは、事実ではないことを言うことですからね、理性は事実ではないことを言うことができる。そこに理性が、よりよいことを考えることができるという能力が出てくる根拠があるんですね。理性は事実ではないことを言うことができる。うそを言うことができる。うそを言うことができるということは、いったいなんなのか。それは理性と能力は事実に縛られてない能力だ。事実に支配されない能力だ。事実の拘束から解き放たれてる能力だ。だから、事実ではないことを言うことができる。事実というのは、現在と過去しかない。理性は事実ではないことを言うことができることによって、未来というものを考えることができる。未来を考えることによって、理性は何をするのか。それは未来に目標や理想や夢や希望や理念というものを掲げることができる。希望も夢も理想も理念も、事実ではないもんだ。理性は、事実から解放されて、うそが言えるという能力によって、未来に理想を掲げることができる。未来に目標をつくることができる。それが理性の価値だ。**

**じゃあ、未来にわれわれが掲げる目標とか理想とか夢とか希望とか理念はなんなのか。それは現実よりもよりよいことだ。だから、理性はよりよいことを考えることができる能力だ。理性は確かに合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力ではあるけれども、しかし、理性はよりよいことを考えることができるというところに理性の価値がある。だから、よりよいことを考えなければ、理性という能力を持ってる意味がない。価値がない。よりよいことというのは絶対こうだということではない。だけど、現実よりもこのほうがよりよいことじゃないかというね、そういう提案なり、考えをすることができる。そこに理性の値打ちがあるんだ。よりよいことを考え続けなければ、理性という能力を持ってる意味がない。値打ちがない。だから、われわれはどうなのかといったら、自分がどんなに自分の考えを正しいと思っても、絶対だと思ったらいかん。自分の考えをどんなに正しいと思っても、それは不完全であり、有限である。完全ではない。絶対ではない。だから、自分と違う考え方に出合ったらならば、自分と違う考えを参考にさせてもらいながら、相手の考えから何かを学び取って、自分の考えをよりよい考え方に発展、成長させましょうと思うと、人間らしい生き方ができる。それが人間らしい謙虚な生き方なんだ。自分の考えを放棄するんじゃない。自信を持ちながらね、自分と違う考え方から何かを学んで、そして、自分の中に取り入れていく。そして、自分の考えを前の考えよりより素晴らしい考えに発展、成長させていく。それが理性という能力を持っておる価値である。それが謙虚な理性の使い方なんだ。そういうふうにして、実際の具体的な、実践的な謙虚さというものを、われわれは自分のものにすることができるわけであります。**

**謙虚な心、謙虚な生き方、謙虚な仕事の仕方というものを、われわれが実践的に自分の身に付けよう、自分のものにしようと思ったならば、われわれは、その自分の考えは不完全である。だから、自分と違う考えに出合ったならば、何かを学んで、そして自分の考えをよりよい考え方に発展、成長させましょう。そういう意識になることによって、われわれは傲慢ではないという生き方を実践的に表現することができる。同じ考え方の人間とばっかり付き合っておったんじゃ、人間は成長しませんからね。違う考え方の人間と付き合って、自分にないものを相手から学び取らないと人間は成長しません。気の合う仲間とばっかりと付き合っておったんじゃ、気分はいいかもしれませんけど、成長はしません。成長しようと思ったならば、積極的に自分にないものを持ってる人間と付き合って、自分にないものを相手から学び取っていこうという、そういう成長意欲がなければならない。人間は成長するものですからね、止まってしまって、成長しなくなったら死んでるんだ。命は変化するものだ。変化しなくなったら死んでるんだ。会社も発展しなくなったら、変化しなくなったら、死んでるんだ。**

**会社を発展させる原理は、変化をつくりだすことである。よりよい方向性の変化をつくりだすことが、会社の発展の、会社活性化の基本原理だ。規則を押し付けて、そして、固定化してしまったのでは、社員は死んでしまう。どんどん、どんどん、新しい提案を受け取りながら、それをかたちに実現していく。たくましい変化の連続、それが会社を活性化させる基本原理ですね。変化こそ命だ。停滞は死を意味する。とにかくわれわれは、自分自身にも、その原則を当てはめなければならない。積極的に異なるものを持ってる人間と関わって、自分にないものを学び取っていこう、つかみ取っていこう。そういう、意欲を持って、われわれは仕事をし、生きなければならない。**

**だけど、原発賛成だ、反対って、そういう違う意見同志だったら、絶対協力できませんよね。賛成だ、反対だって、反対の人間とどうやって協力するんやということになりますからね。大事なのは結論に拘泥してはならない。結論にこだわってはならない。賛成には賛成の根拠があり、反対には反対の根拠がある。その根拠とはいったいなんのかっていったらね、違う考え方というのはいったいどうして出てくるのか。それは、相手が自分とは違う体験を持っておるんだ。自分とは違う経験を持っておるんだ。自分とは違うことを勉強しておる。学習内容は違うんだ。また、相手と自分は人生の出合いが違うんだ。自分が出合ってない事件に出合い、自分が読んでない本を読み、自分が出合ってないような、いろんなものを相手は持っておる。また、物事に対する解釈が違うんだ。考え方が違うとか、立場が違うという背後にはそれがある。だから、自分にない体験と経験と学習内容と出合いと解釈がある。それが考え方の違いとか、立場の違いとか、人間性の違いができてくる原因だ。だからこそ、われわれは、結論における賛成だ、反対だという、その結論にこだわってはならない。自分が賛成なら、反対だって言ってる人間の、その考え方の根拠の中にね、存在する自分とは違う体験、自分とは違う経験、自分とは違う勉強の内容、学習内容、自分とは違う出合い、自分とは違う解釈というものをね、自分が学び取って、もし、あいつのあの体験を俺の中に取り込んだら、俺の考えはどう変わるだろうか、どう成長するだろうか。そういうふうに持っていったならばね、違う、結論の違う人間とも協力し合える、仲よくなれる。**

**これまでは、違うと対立をして、違うとけんかをして、違うと、違うからって戦争をして、違うからって離婚してね、違うということを理由に対立しておった。だけど、これからは、違うんだから、学び合えるじゃないか。違うんだから、教え合えるじゃないか。違うから協力できる、違うから助け合える。そういうふうに時代を、変化させていかなければならないんですからね。だから、われわれは、いつまでも違うからということを理由にね、対立して、そういう低い次元の人生というのを歩んではならない。違っていてもね、教え合える、学び合える、助け合える、そういう愛の力を、われわれは育んでいかなければならない時代にこれから入るんだ。だからこそ、その異なるものから何かを学び取って、そして、この体験を自分の中に取り入れたら、俺の考えはどう成長するだろうか。自分が勉強してない、相手が勉強してる。勉強の内容を俺が学んだら、俺の考えはどう変わるだろうか。自分とは違う解釈を、もし自分の中に取り入れたならばね、自分の考えはどう成長するだろうか。そういうふうにこう、持っていくのが、実践的な謙虚な対応なんですよね。**

**相手から学び取って自分を成長さそうとする。それを自分だけがするんじゃなくて、お互いにそれをするならばね、人間同士は共に教え合いながら、共に成長していって、考えは違うけど協力できる。そういう、生き方が可能なわけであります。それが、実践的、具体的な謙虚さの表現の方法である。異なるものから学び取っていく。そういう気持ちを持ったとき、人間は謙虚な、自信がありながらも謙虚な生き方ができる。とにかく理性は、絶対こうだというようなことは言うことはできない能力なの。自分がどんなに正しいと思っても、それは決して完全ではない。絶対ではない。だから、自分と違う考えに出合ったならば、相手から何かを学び取って、自分の考えを成長させていこうというように持っていかなければならない。あるいは、相手から何も学ぶべきものがないと思ったならば、こういう人間もおって人間というものなんだ。それが人間社会なんだということを認めながら、自分の人間性の幅をつくっていくと。そういう自分と異なる人間性、自分と異なる考え方を持っとる人間がおって現実なんだ。それが人間社会なんだということを、自分が考えて、自分の人間性の幅をつくっていくということのために、自分と異なる考え方や立場や人間性の人間を使わなければならない。それが謙虚に生きるということの実態なんですね。相手の考え方を参考にして自分を成長させていくか。あるいは、そういうやつもおって人間社会なんやと思って、自分の心の幅をつくる、心の広さをつくる。自分の人間性の幅を広げていく。それが、謙虚な生き方ということで、いわゆる傲慢ではない、そういう生き方であります。**

**もう１つ、大事な謙虚さのつくり方、謙虚さがにじみ出てくるという、そういう状態になるためにはどうするかといったら、人間にはどんな人間でも必ず、長所もあるけど、短所もある。長所、短所は半分ずつある。短所のない人間はいない。自分にも短所がある。相手にも短所がある。長所もある。人間性というのは、必ず長所、短所、長所、短所が半分ずつあるんだ。どんな立派な人間とでも長く付き合ったら、必ず相手の中に自分の気に入らんところが、半分出てくる。どんなに好き好き好きでね、結婚してもね、長く、長く一緒に生活しよったら、必ず相手の中に半分、自分の気に入らんところは出てくるんだ。だけど、半分は好きやけどね、だけど、半分は気に入らんところが出てくる。それが人間というもんだ。人間を愛するということは、自分の気に入らんところ、半分持っとる存在を愛する。人間を愛するというと、不完全な存在を愛するということなんだ。その覚悟がなかったならば、結婚生活は絶対、長続きしません。全部、自分の気に入るところばっかりやないと嫌やと思ったら、もうすぐ別れますよ、これはね。皆、個性があるわけですから。皆、それまでの生い立ちが違うんですから。いっぱい自分とは違うものを持っておる。それが肯定できなければね、人間とは付き合えません。長い付き合いできません。**

**どんな人間とでも長く付き合ったらね、好きなところも半分ある。だけども、自分の嫌いなところ、嫌なところも必ず半分出てきてしまうんですよ。それが人間なんだ。人間って、どんな人間でも、自分にとって嫌なところを半分持っておるんだ。それが人間なんだ。そのことを忘れては、人間との付き合いはできません。自分の中にもそれがある。自分の中にも、相手から嫌だなと思われるのが半分あるんだ。相手の中にも必ず、その自分にとって嫌やなと思うところが半分出てくるんだ。そういう意識がね、そういう自覚が、人間に謙虚な心というものを、つくってくれるわけであります。短所がなかったら、人間、謙虚になれません。自分にはどういう短所があるのか。自分にも相手から嫌われるところが半分ある。なのに、相手は自分と付き合ってくれてる。ああ、ありがたい。そういうね、気持ちが謙虚さをつくるわけであります。相手に対する感謝の念というものを、呼び起こすわけですね。謙虚さというのは、短所の自覚から生まれてくるものですからね。**

**また人間には偏見がある。だけど、偏見はなくさなければならないとこう、思ってきたんですよね。だけど、偏見はなくなりません。偏見がなくなってしまったら、人間は謙虚にはなれません。偏見があるから、謙虚な心を持った人間らしい人間になれるんです。だけども、もうずっと小学校からね、偏見をなくしましょう、偏見をなくしましょうって言われてきてるものですから、やっぱり偏見はなくさないかんわなと思ってしまってる人がほとんどなんですよね。だけど、偏見というのは、絶対なくならない。なんでかといったら、人間には肉体がある。人間には肉体があるから、自分の肉体のあるところからしか、人間はものを見ることができないんだ。自分の肉体になるところからしか見えないんだ。自分の肉体になるところでしか感じられないんだ。自分の肉体になるところでしか判断できないんだ。自分の肉体になるところでしか考えられないんだ。肉体がある限りは、そういう空間的な限定がある。どんな立派な人間でも、今、自分の肉体のあるところでしか感じられないんだ。今、自分の肉体のあるところからしか、ものを見ることができないんだ。どんな人間にも必ず偏見はある。また時代には時代の偏見があり、民族には民族の偏見があり、風土には風土の偏見がある。人間は何重にも偏見に覆い尽くされておるのであって、人間は永久に、決して、絶対に偏見からは脱却できない。**

**だけど、その偏見があるから、いろんな対立とか、誤解とか、理解できないとかというようなことが出てくるんじゃないか。だから、やっぱり、偏見をなくさないかんわなっちゅうことになってくる。それはあまりにも単純な、短絡的な発想である。もし、人間が偏見をなくすとして、もう自分には偏見がなくなってしまったということになったらどうなるのか。本当に偏見のない人間になったらどうなるのか。自分の考えに偏見がないと思ってしまったらね、自分と違う考えに出合うと、あいつには偏見があるんだと思ってしまって、自分の偏見のない考え方で、相手の偏見のある考え方を改めさせなければならないというようなことを考えてしまっちゃったりなんかしちゃったりなんかして、自分の考えで、相手の考えを説得したりなんかして、自分と同じ考えにみんなを変えてしまおうというね、そういう傲慢さが出てくる。すなわち、偏見をなくす努力は傲慢な人間をつくるんだ。**

**じゃあ、どうすりゃいいんだと。じゃあ、偏見がなくならないのは、どうすりゃいいんだ。本当に人間が、偏見が持っとる弊害というものを人間的な方法で乗り越えようと思ったならば、偏見をなくす努力はしたらいかんと。大事なことは、偏見があるんだ。俺には偏見があるんだということを強く強く自覚すること。それが大事なんだ。自分には偏見がある。そのことをちゃんとわかったら、自分と違う考えに出合ったら、俺には偏見があるんや。だから、違う考えを参考にしながら、自分の考えの偏り、ゆがみを修整しましょうという謙虚な心が出てくる。それが人間らしい心をつくる方法だ。本当の傲慢ではない心をつくる方法だ。本当の謙虚さをつくる方法だ。人間は偏見を捨てることによって人間として立派になるんじゃない。人間は偏見があることを自覚することによって、偏見があることを知ることによって、人間は立派な人間になれるのである。**

**現在の教育は真っ逆さま、反対だ。偏見をなくそうとすれば、傲慢になるしかない。偏見があることを知ることによって、人間は人間らしい謙虚な心を持つことができる。相手の言うことに耳を傾けて、相手を尊重して、そして、相手から学ぼうという愛を相手に示すことができる。そして、自分が成長できる。それが不完全な人間が成長する原理だ。それが具体的に傲慢ではない人生を歩む方法論なんですよ。俺には偏見がない。そう思った瞬間に成長は止まってしまう。相手から学ぼうとする気持ちはなくなってしまいますからね。自分に偏見があるということを思い続ける限りにおいて、人間はどこまでも成長し続ける。それが傲慢ではない生き方、傲慢ではない仕事の仕方、いろんなところから、新しい着想、発想を受け入れることができる、柔軟な思考能力、そういうものをつくっていく原理であります。短所があってこその人間。偏見があってこその人間。短所がなければ謙虚になれない。偏見がなければ謙虚になれない。短所があってこそ、傲慢ではない気持ちを持つことができる。偏見があることをわかってこそ、初めて人間は傲慢ではないという、そういう実践、生き方ができる。**

**我はなければならない。我をなくそうと思ったら、人間ではなくなってしまう。神になってしまう。仏になってしまう。我があってこその人間。俺には我があるんだということをちゃんと自覚することによって、われわれは相手の立場にも配慮しましょうという謙虚さが出てくる。そして、自分の我を小我から大我へと成長させていく。それが人間だ。我をなくして無我になってしまったら、自分がなくなってしまう。我は俺という人間が存在する存在証明だ。我は俺の存在証明だ。我がなくなってしまったら、一般的な人間だ。そんな人間はいない。人間ではないんだ。我があってこそ人間だ。無我の修行をしちゃったりなんかして、もう俺には我がないっていうことになってしまうとね、俺の言うことには我がないと。だけども、その自分と違う考えが出てくると、あいつの言うことに我があって、あいつの言うことは我のある低い次元の考えだと思ってしまったりなんかしてね。低い次元の考えは、自分のその高い次元の考えに改めさせなければならないというような、そんなことを考えてしまっちゃったりなんかしちゃったりなんかして、また自分の考えで相手を説得して、禅宗のお坊さんみたいに、カーッなんて言って、びっくりさせてしまったりなんかして、びっくりさせて、驚かさせてしまったりなんかして、相手を目覚めさせようと思ったりなんかするんですけど、逆だ。人間であるならば、我があって当然なんだ。無我の修行なんかしておるお坊さんのほうにね、われわれは、カーッて言って、びっくりさせて、気持ちを改めさせてあげなければならないんだ。相手を人間に戻してあげなければならない。本当はね。我があってこそ人間。我がなくなってしまったら、人間じゃないんだ。**

**なんで、そのお坊さん、禅宗は、その無我の修行をするのか。あれは仏のような心を求めるからですよ。仏には肉体がない。肉体がないから、我がないんだ。我欲が出てこない。人間は我欲があってこそ人生。欲があってこそ人生。自分のしたいことをすることが人間なんだ。幸せなんだ。したいことがなくなってしまったら、もうもぬけの殻ですから、人間は。だけど、仏様や神様には肉体がないからね、欲がない。だから、無欲にならないかん。無になれなんていうようなことを言って、本当、無になっちゃったらどうなりますか、人間が。なんにもしたいことがなくなってしまうんですからね。どうしていいかわからん人生です、それはね。何かしら、命から抑えがたきものが湧き上がってきてこそ、人生ですよ。俺はこうなりたい、こうしたい。これが食いたい、これが着たい。こんなすごい家に住みたい。それが人生ですから。だから努力するんですからね。欲があってこそ人生。我があってこそ人生。我があることを忘れてはならない。我があるということを自分がはっきりと認めればね、自分には我がある。だから、相手の立場にも配慮しましょうという、そういう謙虚さが出てくる。**

**まあ、とにかく謙虚になるというね、傲慢ではないという、そういう自分を、仕事の場で実践的につくっていこうと思ったら、われわれは短所の存在をなくそうと思うんじゃなくって、短所があることを忘れてはならない。そうすると、いろんな面で人間関係もうまくいって、相手から学ぼうとする気持ちが出てきて、そして、お客さんの心がわかって、自分の考えを押し付けるということがなくなって、非常にその感じのいい、応対ができるわけであります。また偏見があるということを自分がわかっておったら、相手から学ぼう、教えてもらおうという気持ちが強くなりますからね、相手をいい気分にさせてあげることができる。学び取ろうと思ったら、相手は教える側になりますからね。とにかくそういうふうにして、謙虚さ、傲慢ではないという自分を実践的につくっていくわけであります。自信も大事だけど、必ずその裏には謙虚さが付いていなければならない。自信と謙虚さ、これがまず人生を、たくましく生き抜いていく。成功への人生というものをつくっていく、まずは１番目の、原則、原理であります。**

**２番目の、人生の鉄則、２番目の人生の鉄則は何かと申しますと、これは自分で自分を教育するという、そういう姿勢を自分に対して持っていなければならない。相手から教えてもらったり、相手に助けてもらったりしてる間は、それは他人につくられた人生だと。本当の俺じゃない。本当の自分というのは、自分で自分を教育し、自分で自分をつくっていこうと思わないと、本当に自分の気に入った自分、自分らしい自分、個性ある自分というものはないし、本当の俺の人生というのはつくれない。相手に教えてもらって、相手に助けてもらってる間、それは相手がつくってくれた人生だ。俺の人生じゃない。自分の人生というのは、自分で自分をつくっていくという意志に基づいて自分が生き始めなければ、俺の人生はできない。本当の自分はつくれない。じゃあ、自分で自分を教育するために何が必要なのか。自分で自分を教育するためには、まず最初にわれわれが持たなければならないのは、自分の人生の未来に掲げる理想である。自分の人生の未来に理想というものを掲げなければ、自分の人生はつくれない。**

**理想のない人間、夢のない人間、希望のない人間、目的のない人間、それも奴隷だ。何がしたいの。いや、べつに。そしたら、他人が言うことをさせられるっきゃないんですからね。これ、奴隷の人生だ。何が食いたいの。いや、べつに。他人が選んだものを食わされるの、家畜だ。人間が人間の人生を歩んでいこうと思ったら、常に自分の人生の未来に、こうしたい、こうなりたい、こんなものが着たい、こんなものが食いたい。そういうものをね、未来に掲げなければ、人間の人生は始まらないし、俺の人生は始まらない。理想のない人生は俺のない人生だ。家畜の人生だ。奴隷の人生だ。自分の人生の未来に明確な目標があり、燃えるような理想があって、初めて俺の人生という、俺というものがある人生が始まる。自分で自分を教育しようと思ったならば、必ず自分の人生の未来に真っ赤に燃える理想を掲げなければならない。理想への思いが強くなれば、必ず実現できる。理想が実現できないのは強い思いがないからである。思いが弱いからである。どうしても俺はと思ったらね、必ずなってしまうんですよ、これは。どうしてもと思わない。なれればいいけどなと思ったら、もう絶対なれませんからね。人生は思いの強さだけで決まってしまうんですよ。どうしてもと思ったら、もう是が非でもなってしまうものですよ。どちらでもいい。なれたらいい。これはもう絶対なれないんですね。どうしてもなるんやと思ったらもう、そのためには、今、どうせないかんかと思ってね、今の生き方が違ってきますから、全然ね。なれればいいけどなと思っておったら、これはあなた任せというか、強烈になるための努力ということをするような、そういうエネルギーが出てきませんからね。だから、結局、流される人生だ。強烈な理想のない人生は流される人生だ。流される人生というのは、自分を見失った人生だ。俺のない人生だ。**

**会社に入って、この会社で働く喜びというものをね、生きる喜びというものを獲得しようと思ったら、その会社で働く人間は、会社の夢を、その会社の夢を自分の夢にしなければならない。社長の夢をわが夢にしなければならない。社長と夢を共有する。会社と夢を共有する。それがその会社において、命の輝くような働き方ができる条件である。会社の夢を自分の夢にする。その夢を実現するところに俺の人生があると思ったとき、その会社において働く意欲が湧いてくる。社長の夢を自分の夢にすることによって、その会社における貢献度は全然違ってくる。とにかく、自分の夢というものをね、どうつくりだすかですよ。それが自分の人生を生きる基本原理だ。自分の人生の未来に夢がなかったならば、流されてしまう。船に乗ってどこへ行くのって言って、いや、べつにと言ってると、波に流されるんですからね。あそこに行くんやって、初めて波を切って前進できるのであって、目標のない人生は流される人生だ。目標のない人生は自分を見失った人生だ。自分のない人生だ。目標があってこそ、自分のある人生だ。だけど、理想というものは決して頭で考えたらいかん。命から湧いてくる理想しか実現できない。頭で考えた理想は自分を縛る。頭で考えた計画は堅苦しい、窮屈な人生になってしまう。命から湧いてくる欲求と、その理想を実現するところに自由と開放感がある。喜びになる、生きがいになる人生が始まるんだ。われわれは、自分の理想を命から呼び覚まさなければならない。命から湧いてくる欲求として理想を持たなければ、喜びのある、生きがいのある、自由と開放感のある人生はつくれないんだ。**

**じゃあ、どうすれば自分の命から自分の理想を呼び出せるのか。もうそのためには、３つの問いを自分に掛けなければならない。おまえはどんな人間になりたいんやと問うて、俺はこんな人間になりたい。男なら、俺はこんな男になりたいんや。女性であったならば、自分はこんな女になりたい。それがあってこそ、自分の人生だ。命から湧いてくる欲求を実現するところに喜びのある人生が始まるんだ。頭で考えた計画や理想は自分を縛る。つまんない、窮屈な人生だ。命から欲求を呼び覚まさなければ、自分の人生はないんだ。俺はこんなになってみたい。それを実現するところに自分の人生がある。喜びの人生がある。燃える人生がある。まず人間なんだから、どんな人間になりたいのかということを自分に問うて、自分の命から、自分の人生の理想を呼び覚まさなければならない。理想とは欲望である、欲求である。命から湧いてくるもののことが、まさに命の燃える理想なんだ。頭で考えたものでは命は燃えない。命は縛られてしまう。支配されてしまう。だから、窮屈なんだ。まずはどんな人間になりたいのかと問うて、俺はこんな人間になりたいというものを呼び覚まさなければならない。**

**２番目には、仕事をして金をもうけないけませんからね、どんな仕事がしたいんや。どんなことがしたいんや。自分に問うて、とことん自分にそれを問い詰めて、俺はこんなことをやってみたいというものをね、呼び覚まさなければならない。したいことをする人生、それが幸せな人生だ。したいことのない人生は不幸な人生だ。３つ目は、将来、どんな生活がしたいのか。将来、どんな生活がしたいのかということを自分に問うて、俺は将来、こんなリッチな生活がしたい。俺は将来、こんな生活がしたいんだ。そのことをね、頭に強烈に思い描けば、必ずそれは実現されます。将来どんな生活がしたいのかって、惨めな生活がしたいことはないですからね。将来こんなリッチな生活がしたい。それが強烈になればなるほどね、じゃあ、今どうするのかっていうことがはっきりしてくるわけですよね。未来に掲げる理想が明確になればなるほど、今の生き様がちゃんと定まってくる。それが人生のつくり方だ。まずは、自分で自分を教育するためには、命から湧いてくる理想を持つこと。それがまずは基本であります。**

**それから、２番目は、自分の問いを持つこと。自分の命から湧いてくる問いを持つこと。問題意識のない人生は自分のない人生だ。成長のない人生だ。何かしら問題意識、問題を持って、そして本を読み、問題を持って仕事をし、問題を持って話を聞くと、その問題を持つということは吸収力ですからね。だから、いろんなものが自分に飛び込んでくる。それが自分をつくっていくんですよね。求めなければ入ってこない。求めてつかんだものだけが自分のものだ。求めずして入ってきたものは頭で終わってしまう。観念で止まってしまう。それは自分のもんじゃない。求めないで覚えたものはすぐ忘れてしまう。なんでやろうなと思ってね、ああ、そうかとわかったら、もう一生、忘れませんからね。それは命に染み込むんですよ。問いというのは命から湧いてきますからね。なんでやろうなと思って、ああ、そうかと思ったら、命に染み込みますから、一生、忘れません。自分の人生をつくっていこうと思ったら、２番目に大事なのは、自分の命から湧いてくる問いを持つこと。問題意識ですね。自分の命から湧いてくる問題意識を持つこと。それが自分を成長させる。自分をつくっていく第２番目の原理だ。**

**３番目の原理は、人間としての成長意欲。俺はもっともっと人間として成長したい。自分はもっともっと人間として成長したいんだと。そういう意欲を、持ってることによって、自分で自分を教育するということができます。人間として俺はもっともっと成長したいんや。そういうふうに思わないと、自分で自分を教育はできませんからね。人間の成長というのは、能力における成長と人間性の成長がある。能力における成長は潜在能力の顕現だ。人間性の成長は新しい気付きの積み重ねだ。人間性が成長するためには、心が成長するためには、教育では駄目だ。自分が気付かなければならない。ああ、そうなのかと思ったとき、ああ、そうなんだと思ったとき、人間は成長するんだ。他人に言われて人間は変わらない。自分がそうだと思わなければ、そうなのかと自分が思わなければ、自分は変われない。観念では変わらない。命の気付きが自分を変えるんだ。あと、能力の成長は潜在能力の顕現である。潜在能力を引っ張り出すということがなかったならば、能力は本当には成長しない。潜在能力を引っ張り出そうと思ったならば、今、自分の持ってる力で、できることしかしようとしないという状態では駄目だ。今、自分の持ってる力でなんともならん。だけど、なんとかしたいと思うと、自分の命に潜在するものが湧いてくるという構造が命にできる。それが能力の成長の原理だ。**

**今、自分の持ってる力で、できることしかしようとしなくって、今、自分の持ってる力で、できないことはできませんと簡単に断っておったんじゃね、能力は伸びません。人間として成長しようと思ったら、常にわれわれは、知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦する。それがあらゆる意味で成長の原理だ。世界記録を出すのは、常に体力と気力と知力の挑戦だ。今、自分の持っておる知力の限界に挑戦する。今、自分の持っておる気力の限界に挑戦する。今、自分の持っておる体力の限界に挑戦する。それが自分を成長させる、気力を伸ばす。あらゆるものの成長の原理だ。そうやってしか潜在する能力は出てこない。そういう意味においても、われわれは常に人間としてもっともっと成長したい。能力においても、人間性においても、もっともっと自分は成長したい。それが成功への人生、幸せへの人生をつくっていく原理ですね。現実を生き抜く原理であります。まあ、全部でこの５項目あるわけですけども、２つ、まず話しました。ちょっとここで10分間ほど休憩を入れまして、あと、８時までですね。残りの３つを話させてもらいたいと思います。じゃあ、ちょっと休憩します。ありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、先ほどの続きです。今度は人生の鉄則の第３番目ですね。限界への挑戦。これは、先ほど申し上げましたように、自分で自分を教育するということの第３番目の条件である、この人間としてもっともっと成長したいというところから必然的に出てくる、第３番目の問題ですけども、とにかく自分で自分を教育していくという、そういう人生を歩むということを、していくために、次に問題になるのは、今、自分の持ってる力の限界へ挑戦するという、限界への挑戦という人生の姿勢であります。だけども、今、自分の持ってる力の限界に挑戦するということは非常に苦しいんですよね。だから、ついつい、そこからこう、逃げたいという、そういう気持ちが出てくる。だけども、やっぱり、その苦しさから逃げておったのでは自分の成長はない。だから、限界への挑戦という、そういうこの人生の鉄則において一番大事な原則はなんなのか。それは逃げたらいかんぞということですね。逃げたらいかんという気迫で人生に向かっていくという、あらゆることに向かっていくという、気迫がなかったならば、自分の人生を成功へと、幸せへと着実にこう、積み重ねていくということはできないと思います。とにかく３番目の限界への挑戦という、人生の鉄則において一番大事な原理は、逃げたらいかんぞ。向かっていくという気迫をどこまで、あらゆる事柄において持ち続けるかですね。それが大事であります。**

**だから、なんで逃げたらいかんのかということをね、ちゃんと根拠としてわかっていなければならない。問題とか、悩みとか、苦しみというものは、決して自分を苦しめるために出てくるんじゃない。問題、悩み、苦しみは、自分を成長させるためにだけ出てくるんだと。その問題、苦しみ、悩みの現象の意味を、われわれはちゃんと解釈して持っていなければならない。問題がなかったならば、人間は成長しない。悩みがなかったならば、人間は成長しない。苦しいという、この命の実感、体験というものがなかったならば、われわれの命は本当には磨かれない。成長はないんだ。問題、悩み、苦しみは、自分を成長させるためにだけ出てきてるんだということをどれだけ、自分が感性の実感として納得するかですね。問題がないというふうに言ってる状況というのは、それは、今、自分の持ってる力でできることしかしようとしてない。今、自分の持ってる力でできないことは、できませんと言って断ってるからね、問題は出てこない。あまり悩みが出てこないんですね。**

**だけども、今、自分の持ってる力でできないことをできるようにしていこうと思ったら、やっぱり人間は苦しまなければならない。やっぱり何かしら、悩まなければならない。努力しなければならない。問題が出てくる。その問題を乗り越えていくことによってしか、われわれは自分の人生、未来というものを、つかみ取ることはできないんだ。未来というものを自分が開いていくことはできない。問題、苦しみ、悩みは、自分を成長させるためにだけ出てくるんだ。今、自分が歩いておる、今、自分がやってる仕事の、その道から出てくる問題というのはなんなのか。それはこういう問題を乗り越えていく力をつくっていかんと、君はこの道では成功できませんよ。この道ではやっていけませんよ。そのことを、教えてくれるために出てくるのが、今、自分がやってる仕事の道から出てくる問題の意味ですね。今、自分がやってる仕事の道から、今、自分がやってる仕事の道から出てくる問題を乗り越えられなかったらね、もうその道では絶対、成功はできません。もうその道から前進できません。人間の人生は自分が乗り越えた問題の方向性へとしか前進できない。進んでいけない。成功した人間というのは、みんな問題、自分の歩いてる道から出てくる問題を乗り越えた人間が成功した人間なんだ。問題から逃げた人間は、その道では絶対、成功できない。だから、問題、悩みというものは、自分を成長させるためにだけ出てくるんだ。**

**また、どんな努力をすれば成功できるのか。どんな悩みを乗り越えれば自分は幸せになれるのか。どうすれば自分が自分の幸せをつくっていく実力をつくれるのか。そのことを、自分に教えてくれるために出てくるのが、自分の今、歩いとる道から出てくる問題、悩み、苦しみの意味だ。問題、悩みは、自分を成長させるために出てくる。問題、悩みは、成功への一列からである。この方向へ来いよ。そしたら、君は成功できるぞということをね、自分に教えてくれる。それが今、自分が歩いとる道から出てくる問題、悩みの意味だ。この問題、悩みから逃げたら、君は人生を捨てることになるぞ。こちらへ来いよ。それが、今、自分が歩いとる道から出てくる問題、悩みの意味だ。そのことさえできるならば、どんな人間でもね、必ず、成功の人生、輝く人生というものをものにすることができる。とにかく限界への挑戦という、自分の個性ある人生というものをつくり続けていく。この道筋を歩んでいくことで一番大事なのは、逃げたらいかんぞ。向かっていく。この気迫ですね。だけども、成長する、前進するということは、逃げたらいかんぜっていってこう、突っ立っておっただけじゃ、張り倒されてしまったら一巻の終わりですからね。逃げたらいかんという気迫で何をするかですね。乗り越えなければ、これは意味がないんですからね。どうすれば、今の目の前にある問題、悩みを乗り越えて、自分を成長させることができるのか。それが次に大事なことである。**

**だけども、その問題を乗り越える。悩みを乗り越えるという力をね、自分につくっていくために、まずとにかくは前提条件として、自分が持っていなければならない心構えが、逃げたらいかん、向かっていくという気迫なんですね。逃げたいという気持ちがちょっとでも出てくると、今、自分の置かれてる状況が浅くしか読み取れない。また、ちょっとでも逃げたいという気持ちが出てくると、今、自分の置かれてる状況がゆがんで見えてしまって、正確に今、自分の置かれてる状況を読み取れないですね。また誰かに助けてもらいたいという依頼心が出てくると、誰かに助けてもらいたいという依頼心が出てくる分だけ、自分の底力が出てこない。潜在能力の顕現が抑えられてしまう。だいたい火事場のばか力というのはね、誰にも助けてもらえへんと。もう俺がなんとかするっきゃないと思うんで、ついついこう、自分でもびっくりするような力が湧いてくるんですよね。自分の底力が湧いてくるためには、依頼心を持ったらいかん。俺一人の力でなんとかしようと思わんないかんと。逃げたいという気持ちが出てきたら、現実はゆがんで見えてしまう。現実は浅くしか読み取れない。だから、本当にその問題を乗り越える力、その問題の核心というものを自分がつかみ取る眼力というものが鈍ってしまうと。**

**とにかく問題を乗り越えるためには、逃げへんぞという、向かっていくという気迫で、今、自分の置かれてる現実をねめ付ける眼力が必要である。それなしには、問題の核心というものをつかむ力は出てこない。そして、本当に今、自分の置かれてる問題を乗り越えていこうと思ったらどうするかといったら、どんな悩みでも、どんな問題でも、必ずもし悩みを他人から相談されたら、俺はその他人にどう言ってやるだろうかという、そういう理性の使い方をしないと、正しい回答が出ないんですよ。ほとんどの人たちは悩みながら考える。苦しみながら考える。問題を抱えながら考える。だから、必ず八方ふさがりになってしまう。出口が見えない。ついにですね、もう俺が死ぬっきゃないかと思ってしまったり、問題を放棄して逃げたりしてしまう。結局は駄目になってしまう。なんでね、なんで他人から相談されたらというように持っていかなければならないのか。それは理性という能力が、どういう能力かというと、理性という能力は客観性と普遍性の能力だ。理性という能力は客観性の能力であるから、外から問題を見るって立場を理性に与えてあげないと、理性は正しい回答は出せない。また理性は普遍性の能力だ。普遍性とは、みんなに共通することですけども、普遍性という能力を理性で使うためには、普遍性全体を見る。全体というものを意識するっちゅうことが、非常に大事な条件である。だから、理性能力を正しく働かせようと思ったならば、また理性能力を使って正しい回答を出そうと思ったならば、理性は客観性と普遍性の能力であるから、だから、物事を外から全体を見るという立場を理性に与えてあげるということが、理性の能力を使って問題を解決し、乗り越えていくという、基本原理である。**

**具体的にはどういうことかといったら、例えばの話が、深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中へ迷い込んでしまって、どちらのほうに進んでいったら、その森から早く出られるかなということをね、迷い込んでる状態で考えたら、絶対、結論は出ませんよ。向こうのほうが明るいから、向こうに行ったら、ひょっとしたら出られるかもしらんなと思って進んでいったら、また真っ暗になってしまってね、もうこれは真っ暗やなと思って、また帰ってきたりなんかして。あれこれ思い悩んで動いてる間にもう、ついに行き倒れになってしまって、疲れ果てて死んでしまう。じゃあ、どうしたら、森に迷い込んだときに、どうすれば、その森から一番早く出るルートがすぐわかるのかといったら、方法論としては、その森の中に生えておる一番高い木のてっぺんに登って、その一番高い木のてっぺんから森全体を外から眺めるならばね、そこにおるんやったら、こう行ったらそこへ出られるやないかって、答えがすぐ出るわけですよ。これが理性の使い方っちゅうんです。理性と能力は、問題を外から全体が見えるという状態に理性を置いてあげないと、理性は絶対に正しい回答は出せない。そういう能力なんですよ。**

**だから、自分が悩みを持ったら、必ずどうするか。子どもの問題で悩み、夫婦の問題で悩み、会社の問題で悩み、人間関係の問題で悩み、どんな問題に当たったときでも、常にどうするか。もしこの悩みが他人の悩みであって、他人から俺が相談されたとしたならば、俺はその人にどう言ってやるだろうかと思ったら、必ず正しい回答が出るんですよ。自分で考えたらね、もう八方ふさがりになってしまって、もう俺が死ぬっきゃないなと思ってしまう状況でもね、もしそれが他人から相談されたものであったとするならば、必ずどう言うかといったら、自分で考えたら、死ぬっきゃないと思う状況でも、他人ごとだったら、まあ、待てよと。死ぬことはないやないか。死ぬ気になったらなんでもできるやないかと、まずは言ってあげられるんですよね。自分で考えたら、もう死ぬっきゃないと思うことでもですよ、他人ごとだったら、じゃあ、死ねよとは言いませんからね。まあ、待てよと言ってしまう。まあ、待てよという、このゆとりがね、物事を客観的に眺める。その感覚というか、この幅をつくってくれる。距離をつくってくれる。それがゆとりなんですね。**

**ほとんどの、ほとんど自殺する人というのは、悩みながら考えるんですよ。こうするとこういう問題が出てくるしな。すなわち、人間のすることはね、100％いいことはない。どんないいことをしても半分は悪いことになってしまうというか、半分はマイナスなんですよね。どんないいことをしても、プラスの面とマイナスの面があるんですよ。だから、自分でいろいろ考えると、こうすると、こうすると、この人に迷惑を掛けてしまうしな。こうしたら、自分が隠しておきたいことがわかってしまうしな。こういうことをしたら、新しい問題が出てくるしな。もう何をやっても全部ね、マイナス面が見えてくるんですよ。もう何やってもいかんな。もうどうしようもないな。もうこうなったら、もう俺が死ぬ、死んでわびるっきゃないかと。自分で悩みながら考えるとね、物事のマイナス面ばっかり見えてきますからね、何をやっても全部マイナスになりますから、マイナスに見えますから、八方ふさがりになるんですよ。だから、他人ごとだったらと思ったらね、必ずいい回答が出るんですよ。それは理性能力が、客観性と普遍性の能力であるからです。だいたい宇宙の中におる人間がね、宇宙がどんなもんなのかっちゅうことを知ろうと思っても、宇宙の中におったらわからんのですよ。宇宙の外に立って、宇宙を外から眺めてみないと、宇宙はこうやって、そんな断定的なことは言えないんですね。とにかく外から見ないと本当のことはわからん。本当の判断はできない。それが理性能力というものなんですよ。**

**問題は感性が感じるんですけども、答えを出すのは理性ですからね。理性を正しく働かせようと思ったら、常にそうしなきゃならない。だいたいどんな立派な社長さんでもね、会社の問題を悩みながら考えたらね、八方ふさがりになって、全然いい回答、いい答えは出ないんですよ。だけども、経営コンサルタントっちゅうのは、外からやってくるんですよね。本当、そう大した経営コンサルタントじゃなかってもね、外からやってくる人間はね、問題を相談すると、ああ、それはこうしたらいいですよと、すぐ回答を出すんですよ。なんでそんなことができるんやと。すごいこの素晴らしい経営者でね、経営者として立派なんだけども、その会社から出てくる問題に悩んで、悩んで、悩んで、よう回答が出せないというような、そういう経営者が案外多い。ついつい、経営コンサルタントに相談してね、経営コンサルタントに何かしら教えてもらって、会社の改革をする。なんでそんなことが経営コンサルタントにできるの。それは外から見るからですよ。だから、はっきりとものが見えてしまうんです。**

**だいたいその週刊誌に書いてある芸能人の、問題なんかでも、芸能人本人は自分の問題だから、もう悩みに悩んで、神経衰弱になってんですけど、だけども、その週刊誌を読む奥さま方はね、そんなことはこうしたらいいんだよねって、すぐもう回答、素晴らしい回答を出してるんですよ。他人ごとだったらね、本当、気楽に、一番最高の答えがぱっと出せるんですよ。だけど、本人はね、悩みながら考えるからね、何をやっても全部、八方ふさがり、どうしてもうまくいかんということになる。それは悩みのどつぼにはまるからですね。悩みのどつぼにはまって、考えるから、見えないんですよ。外から見たら、その問題がはっきり見えてしまう。その問題の核心がちゃんとつかめる。それが、その理性という能力の使い方の問題なんですね。もうこれだけわかっただけでも、随分、人生が楽になりますよ。ほとんどの問題はそれで乗り越えられますから。もし、他人ごとだったら、俺はどう言ってやるだろうか。他人ごとだったら、自分は気楽になりますからね。そんなことはこうしたらいいんだ。すぐわかってしまうんですよ。**

**夫婦げんかは犬も食わないと申しますけど、夫婦だけでがちがちになってやってると、外から自分を見るという目ができませんからね。だからもう、ちっちゃな問題でも、もう死ぬか生きるかみたいなけんかしてるわけですよ。外から見たら、何やってんのという感じで、そんなちっぽけなことで、そんながちで、むちゃくちゃなことをする必要ないやないかって言ってしまう。でも、本人たちはそれがわからんのでね、もう、ものを投げるわね、もうめちゃめちゃのけんかしてると。外から見たら、もう子どもじみてるというようなことで、その他人の夫婦げんかは、ばかばかしく見えるんですよね。ちっちゃなことで何をやってんの。だけど、自分の問題になってくると、それがもうとんでもないね、大きな問題になってくるんですね。とにかく中にはまってそれを考えるのと、外から見るのでは大違いなんですよ。ぜひ、そのことを、皆さん方もこの仕事で、仕事の人間関係から出てくる問題とか、あるいはお客さんとのあいだの問題とか、いろんな問題、家庭の問題でも、いろんな問題、とにかくそのことをやってみてください。必ず、道が開けます。自分でわかってしまいます。誰にも相談せんでも。全部、自分で自分の人生を切り開いていくことができるんですよ。**

**だけども、そこで重要なことは、１回で物事がぱっとうまくいってしまうということはないんですよ。１回でうまくいってしまうとね、かえって自信がつくれないんです。１回でうまくいってしまうと、今度はうまくいけるかなっていう不安が出てくるんですよ。だけども、何回も何回も、こうしてみたらこうなって、こうしてみたらこうなってっていうね、そういうプロセスを踏んでいくと、だんだん自信が湧いてくるんですね。だから、まずその自分の困った状況を、他人から相談されたらというふうに持っていって、この状況で相談されたら、俺はこういうふうに言ってやるだろうなと思ったら、それをやってみるんですね。やってみると状況が動くんですよ。状況が動くと、より的確にその状況は見えてくる。またその状況で相談されたらということで、その状況で相談されたら、俺はこう言ってやるだろうなと思うことをやってみる。やってみると、また状況が動く。だんだん、だんだん、その自分の置かれてる状況、状態がはっきり読み取れてくる。そういうことを繰り返しながら、こうしたらこうなった、こうしたらこうなった。だんだん、その状況の本質が見えてくるもんですから、その積み重ねで、ようやく、その問題を乗り越えられたっていう結果が出たらどうなるかといったら、そうすると、どういう状況であっても、俺が出ていったら、なんとかできるなというね。そういう自信が湧いてくるんですよ。**

**１回でうまくいってしまうと、かえって今度はうまくいくかなと不安が出てくるんですよ。だけど、何回も何回も失敗を重ねながらね、最後はうまくいったっていう成功体験をつかむと、どうなるかといったら、どんな状況でも、俺が出ていったらなんとかできるもんやな。なんとかできるな。そういう、自信めいたものが湧いてきます。必ずそうなるんですよ。１回でうまくいってしまったらいかんのですよ。何回か繰り返しながらね、こうしたらこうなる、こうしたらこうなった。じゃあ、そのときどうするか。こうしてみよう。こうなった。その積み重ねが自信というものをつくっていく原理。自信というものは、努力して、失敗の積み重ねが自信をつくるんですよ。失敗を積み重ねていかないと、人間的な自信はできません。人間は不完全な存在ですからね、不完全な存在が自信というものを持とうと思ったならば、失敗の積み重ねが大事なんですよ。それが人間的自信のつくり方なんです。だから、失敗しっぱなしじゃ駄目ですけどね、最後に成功というものを勝ち取らないと自信はできないんですけども、だけども、その失敗の積み重ねが、だんだん、だんだんと成功に近づいていって、最後にうまくいったという体験をつかんだとき、本当の人間的自信が湧いてくる。それが実力のつくり方なんですよ。実力というのは失敗を積み重ねてつくっていくもんなんですね。失敗したことのない人間は不安のほうが大きいんですよ、いつも。失敗を積み重ねた人間は強いんですよ。どんなことでも、俺が出ていったらなんとかできるなという、そういうね、気持ちが湧いてきます。失敗を恐れてはなりません。だけども、失敗しっぱなしじゃ、これはもうどうしようもないですからね、失敗しっぱなしじゃいかんけど、失敗を積み重ねて最後につかんだ自信、それが本当の実力というものです。**

**とにかく、限界への挑戦という仕方で、この人生を生き抜いていくということをするために、まずは、まず大事なのは、逃げたらいかん。逃げへんぞという、そういう気構えで、まずは問題にぶつかっていく。向かっていくという、この気迫を忘れてはならないと。それが成長の原理だ。どうしたら乗り越えられるのか。それはどんなことでも、とにかくは、他人から相談されたら、俺はその他人にどう言ってやるだろうか。そして、俺ならこう言ってやるだろうと思ったことを自分でやってみる。だけども、何回か失敗を重ねなければ実力にならないと。いっぺんでうまくいくっちゅうことは絶対にないし、また、あってはならない。必ず何回か失敗を積み重ねることが、実力というものをつくる方法だ。それが、人間にとっての非常に大事な、気休めということじゃないんだけども、その気楽というか、案外と失敗してもええんやったらやってみようかなという気持ちになれるところなんですよね。**

**とにかく自分の今、歩いておる道から出てくる問題というものは、自分を成長させるためにだけ出てくるんだ。問題がなかったら人間は成長できない。悩みがなかったら新しい気付きは湧いてこない。問題があってこそ人生、悩みがあってこそ人生。人間そのものがね、不完全なんだから、問題は常にあるのである。問題を乗り越えていくことが人生だ。だけども、人生には、どんな問題でも乗り越えていかないかんと思ったら、これは人間としてはちょっと荷が重たい。人間自身は不完全ですからね。だから、人生には逃げなければならない問題もある。逃げてもいい問題もある。だけども、絶対逃げたらいかんというのは、自分の意志と決断で選び取った人生の道筋から必然的に出てくるような問題から逃げたらいかん。自分が選んだ道から出てくる問題というのは、これは俺がやらんで誰がやるんやという問題ですからね。逃げてどうするんや。逃げたら卑怯やという、そういうことですからね。自分が選んだ道から出てくる問題なんだ。どんな問題が出てきたって、あとは俺に任せとけ。俺がなんとかしたるという以外にない道筋ですからね、これは。**

**他人に助けてもらうわけにはいかん問題が、自分の人生から、自分の選んだ人生から出てくる問題なんですから、だから、自分が選んだ道から出てくる問題だけは、これは自分が引き受けていかんないかん問題なんだ。なぜならそれが自分を成功させてくれる問題なんだから。自分が今、自分が選んで歩み始めた、その道から出てくる問題こそ、どういう問題、どういう悩みを乗り越える力をつくっていったら、君は成功できるのか、君は幸せになれるのか。こういう悩みを乗り越えたら、君は幸せになれるぞ、この力をつくっていけよといって、親切に出てきてくれてるんですからね。乗り越えんでどうするんやと。乗り越えんということは、自分が自分の人生を放棄するんだ。そういうことになりますからね。とにかく自分が選んだ道から出てくる問題だけは俺に任せとけ。どんなことがあっても、とにかくは俺がなんとかしたるということで引き受けていかないかん。それが自分の人生のつくり方だ。だから、逃げたらいかん。向かっていかないかん。限界への挑戦というのは、そういう内容を、持ってるわけですね。**

**次、４番目ですね。４番目のこの人生の鉄則というのは、人間が生きるということは、一瞬一瞬が、ああもできる、こうもできる、そうもできる、どうもできる、いろいろできる。今日はこのセミナーに参加することもできたけども、ほかの仕事をしとることもできたしね、ひょっとしたら、恋人とデートをしてるようなこともあったかもしれないというと、会社を休まないかんことになりますけど、とにかくは、いろんなことをすることができた。だけどもここに来た。もうこれは一種の自分の決断なんですよね。人生というのは、一瞬一瞬が、多くの可能性を持ってる。だけど、その一瞬一瞬の多くの可能性のある中から、いかなる未来を、いかなる存在を選び取るかという決断が人生だ。人生とは、自分が一瞬一瞬に選び取った、その決断の積み重ねが人生だ。それ以外の人生はあり得ない。今、自分があるものを選び取れば、もうその決断、その事実は一生消えない。今、自分がこの会場で、どういう態度でその話を聞いてるか。どういう気持ちでこの話を聞いてるか。その一瞬一瞬のその自分の気持ちや態度が自分をつくってるんだ。もうそれは一生消えない事実だ。今ここで、どういう意識でおるかと。それは自分の中で自分を積み重ねてるんだ。自分はそういう人間になるんだ。それ以外のありようはできない。いいかげんな気持ちで今の一瞬を過ごしておったら、いいかげんな人間になってしまうんだ。自分の今の一瞬の思いが自分を決定する。まあ、そういう力をね、持ってるわけであります。**

**人生とは、一瞬一瞬の決断の積み重ねだ。それ以外の人生はあり得ない。だから、今、自分が自分の人生の未来のために何を選び取るかということは、これはもう消すことのできない重大な決断と言っていいんですね。だからこそ、今、一瞬の決断というものは、未来を懸けた決断。自分の命を懸けた決断。人生を懸けた決断というふうにね、考えなければならない。原理はそうなんだけども、だけども、自分が今、一生懸命に考えてね、この道を選び取ることが自分の人生にとって幸せへと、成功へと結び付いていく、これは最高の決断なんだと思って、この道でいこうとこう、自分がある道を選び取っても、果たしてその決断がね、本当に自分の人生を幸せに、また成功へと導いてくれるかどうかは、これは一生、誰にも、決して、絶対にわからん話なんですよ。人生は、残念ながら、一寸先は闇なんだ。ひょっとして、ひょっとして、ひょっとすると、次の一瞬には大地震でね、もうみんな死んじゃっちゃってるかもしれないと。もう先がわかんのが人生。先がわからんのやったら、もう今、どうだってええじゃんちゅうことになってしまったりなんかするんですけど、それではね、本当にこう、自分が自分の命を生かすという生き方はできない。**

**生きるのであるならば、自分が喜びを感じながら、人生を生きようとするのであるならば、どういう生き方をしなきゃならないか、といったら、人間の生き方というのは、結局、今、自分が選んだその決断に、自分の人生を、自分の全情熱を、自分の命を懸け切っていくという生き方以外にないんですね。すなわち、人生というのは、一瞬一瞬の積み重ねですから、一瞬一瞬を充実させていく以外に悔いのない人生というものを歩む方法はない。今の一瞬を充実させることがね、悔いがないと言って死んでいける人生をつくる方法なんだ。悔いのない人生というのは、今の一瞬を充実させるっきゃない。次の一瞬、どうなるかわからんのですから、今の一瞬を充実させる以外に、悔いのない人生というものを生きる方法はない。**

**人生は賭けだ。賭けるという気持ちができなければ、われわれは本当の人生というものを知ることはできない。人生は賭けだ。まあ、本当に人生の真実は、半か丁かという、まあ、丁半賭博なんですね。ばくちみたいなもんですよ。結婚も、仕事を選ぶということも、ある意味でばくちだ。賭けるっきゃないのが人生だ。まあ、とにかく、その人生が賭けであればあるほど、賭けようと思ったならば、今、自分がどの道を選び取るかということで賭けようと思ったならば、一生懸命に考えて、そして、この道が俺の人生にとって最高の人生だっていう道を選ばないと、賭けるという、そういう気迫は出てきません。賭け切っていくという情熱は湧いてきません。賭けるためには、一瞬一瞬、最高の選択をしなければならない。でないと賭けられない。だけども、今、最高の道を選んだと思っても、その道が本当に自分の人生を幸せに、成功へと導いてくれるかどうかはわからない。だけども、悔いのない人生を歩もうと思ったら、一瞬一瞬を充実させていくっきゃない。**

**ひょっとしたら、長生きするかもしれませんからね。次の一瞬、死んでしまうんやったら、今はどうでもいいかもしれませんけど、ひょっとして、ひょっとして、ひょっとしたら、100歳以上になっちゃうかもしれませんからね。100歳以上も生きるのに、そんな不幸な人生じゃ、これは本当に情けないですからね。やっぱり、一瞬一瞬、充実させていくような、そういう人生を生きるしか、生きるということはできない。とにかくそのためには、今、最高の道を、自分が選び取らなければならない。だけども、この人生の迷いというのはどういうところから生じるかといったら、この道を選ぶことが、自分の人生を成功へと、幸せへと導いていく最高の決断だ。この道でいこうと、自分が決めて、歩み始めても、そこから問題が出てくるとね、どうなるか。結婚して、この人と一緒に過ごしていこうと思って結婚したんだけど、そこから大きな問題が出てくるとね、すると、必ずどうなるかといったら、こいつと結婚したからね、こんな問題が出てきたんだ。あちらの人と結婚しておったら、こんな問題は出てこなかったかもしれない。失敗したなと思うんですね。それが実は人生の迷いなんですよ。それは理性ゆえの迷いというんですよ。**

**理性というのは人間に完全性を求める。だから、理性でうまく考えればね、まったく問題の出てこないような素晴らしい道筋があるはずなんだと思ってしまう。これが理性ゆえの人間の迷いというんですよ。理性で人生を考えると、問題が出てくると、その決断に間違いがあったと思ってしまうんですよ。他の決断をしておったならば、こんなことにはならなかった。これが理性ゆえの迷いなんですよ。なぜかといったらね、人間は不完全な存在ですから、どの道を選んでも、誰と結婚してもね、必ずその人と結婚しなければ出てこない問題と悩みは出てくるようになってるんですよ。すなわち、人間が不完全だから、悩みのない人生はない。問題の出てこない人生はないんですよ。だのにね、問題が出てくると、ああ、こいつと結婚したから、この道を選んだから、こんな問題が出てきてしまったんだ。あちらの人と結婚しておったら、こんなことにはならなかったかもしれない。失敗したなと思う。これが理性ゆえの迷いというね、不幸な人生の始まりなんですよ。実際は、誰と結婚しても、どの道を選んでも、人間が幸せを求める限り、成功を求める限り、必ず問題と悩みは出てくるようになってるんですよ。でなかったら、成長しませんからね。また自分が不完全なんですから、どんなことをしても必ず、完璧はないんですから。何かすれば必ず問題が出てくる。そういう、それが人生なんだ。**

**問題のない道筋はない。悩みのない道筋はない。問題のない人生はない。悩みのない人生はない。なのに、理性で考えるとうまく道を選んだならば、あまり大きな問題は出てこない。幸せな人生への道筋は必ずあるはずなんだと思ってしまう。これは理性ゆえの迷いだ。人生の迷いに陥らないためには何が大事なのか。どんな道を歩んでも、必ず悩みと問題は出てくるようになってるんだから、だから、悩みが出てきたときに、問題が出てきたときにひるんだらいかん。逃げたらいかん。それは自分を幸せにするために、自分を成長させるために、出てきてくれてる問題なんだから、逃げたらいかん。向かっていかないかん。じゃあ、向かっていくためには何が大事なのか。そしたら、そのためには、人生において一番大事なことは、何かを自分が決断し、選び取ったならば、そのとき、自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨てがたい素晴らしいものがあったとしても、何かを自分が選び取ってしまったならば、他の可能性は全部捨て切る。捨てる勇気がね、悔いのない、素晴らしい人生を保証するのであります。**

**われわれが人間的に素晴らしい人生をつくっていこうと思ったならば、必ず何が大事なのか。それは捨てる勇気だ。あるものを選び取ったならば、他の可能性は全部捨て切る。捨てる勇気が自分に幸せと成功をもたらせてくれるのである。なぜならば、捨てる勇気がなかったならば、問題が出てくる度に、人間はひょっとしたらと考える。ひょっとしたら、あちらのほうがと思った瞬間に、今、自分が選び取ったそのものに自分の全情熱を傾けるということができなくなってしまう。ひょっとしたらと思った瞬間に自分は不幸になってしまう。そして、今、自分が選び取ったそのものに自分の全情熱を自分が注ぎ込めない。相手にも十分な満足を与えてあげられなくなってしまう。相手も不幸にしてしまう。捨てる勇気のない人間は、問題が出てくる度にね、迷ってしまう。あらゆることが半端になってしまう。ひょっとしたらと思う、もうその瞬間に自分が不幸になる。しかも、相手にも、十分な満足を与えてあげられない。相手も不幸にしてしまう。結局、ひょっとしたらという、この思いが、人生を不幸にしてしまうんだ。それがあらゆる人が人生を誤る、間違う、最大の問題なんですよ。**

**人生は賭けだ。人生は今、一瞬の決断に自分の全情熱を、全存在を、命を賭けるというね、そういう思いがなかったならば、本当の自分の人生というものをつくっていけない。だから、何かを自分が選び取ったならば、もう絶対に悔いてはならない。迷ってはならない。もうその一本道を突っ走るっきゃない。それが吹っ切れた、本当の素晴らしい人生への始まりなんだ。今、自分が選んだ道から出てくる問題を、ひょっとしたらあちらのほうがと思った瞬間に、もう自分はその人生を捨てることになってしまう。その人生に自分の情熱を注ぎ切ることができない。ひょっとしたらと思ったら、集中力がなくなってしまう。集中力がなくなれば、自分の本当の底力が出てこない。底力が出てこないから、あらゆることが半端になってしまう。底力が出てこないから、あらゆることが乗り越えられなくなってしまうんだ。問題が出てきたときに、ひょっとしたらと思った瞬間に、その問題は乗り越えられない問題になってしまうんだ。決断に際して、この道を選んだ限りは、ほかの可能性、全部捨て切る。捨てる勇気を持って、あるものを選び取った人間だけが、その道から出てくる問題を乗り越え続けなければならないという一本道をまっしぐらに進んでいく力を持つことができる。それが集中力だ。集中力を持って事に臨まなければ底力は出てこない。潜在能力は湧いてこない。ひょっとしたらと思ったその迷いが人間を駄目にする。人生を捨てることになってしまう。自分の本当の力が湧いてこない原因をつくってしまう。**

**とにかく決断において一番大事なのは、捨てる勇気だ。あるものを選び取ったならば、その道からどんな問題が出てこようともね、ひょっとしたらと思ったらいかん。それが自分の不幸の始まりだ。自分が今、決断して選び取ったもの。あるいは偶然に自分に与えられたようなね、そういう出合いであっても、それはすべて人智を越えた計らいによって自分に縁を持ったものだ。自分の人生の未来は、今、自分に縁を持ったそのものを通してしか、本当の自分の人生は開けない。今、自分が選び取ったもの、今、自分の手の中にあるものに、自分が真剣に関わり続ける以外に、自分の人生をつくっていく道はないんだ。そのことをね、チルチル、ミチルの『青い鳥』、小鳥という童話は、人間に教えてくれてる。もっと幸せなものがあるはずなんだと思って外に探しに行くんですよね。青い鳥、小鳥を。だけど、どこに行っても見つからなかった。家に帰ってきたら、自分の手の中にすでにその幸せの青い鳥があったというね、そういう寓話ですけども、だけども、それがそもそも迷ったらいかんということをね、人間に教えてくれるんだ。一番大事なものは、もうすでに人智を越えた計らいによって自分に与えられてるんだ。今、自分の手の中にあるものを生かし切っていく以外に、人生はない。今、自分の手の中にあるものをないがしろにして、何が人生だ。それは自分の人生を捨てることなんだ。今、自分の手の中にあるものに真剣に関わり、今、自分の手の中にあるものを生かし切っていこうとするところに、初めて自分の人生の道筋が開けてくるんだ。それを『青い鳥』、小鳥は、人間に教えてくれてるわけであります。**

**迷ったらいかん。もうすでに大事なものは自分の手の中に与えられてる。とにかくばかになって、もう今、自分に与えられておるもの。今、自分が選んだその道にばかになって、まっしぐらにね、その道を進み切っていく、歩み抜いていく以外に、人間の人生の本道はない。それがこの決断に賭けるという、人生の鉄則であります。多くの人間はこのことができないために、ひょっとしたらという思いを常に持ってしまうがために、自ら人生を捨てるんだ。だから、不幸になるんだ。本当の幸せっていうのは、賭けなければ出てこない。迷いの人生が不幸をつくる。ばかになって、まっしぐらに進んでいく人生、それが悔いのない人生をつくっていく方法だ。何かを選んだならば、何かを自分が選び取ったならば、そのとき、自分が選び取らなかったものの中に、捨てがたい、いかに貴重なものがあったとしても、あるものを選んだならば、他の可能性は全部捨て切る。捨てる勇気が自分に幸福な人生を約束してくれる。そして、その自分が選んだその道を歩むプロセスに出てくる問題、悩みから逃げたらいかん。問題が出てきたときに、ひょっとしたらと思ったらいかん。それが迷いだ。どの道を選んでも、必ず問題、悩みは出てくるんだ。その道を選んだから、問題は出てきたんじゃない。どの道を選んでも、問題と悩みは出てくるようになってるんだ。それが人生だ。**

**だからこそ、ひょっとしたらという思いは迷いなんだ。問題の出てこない完璧な道なんてないんだ。人生は賭けだということは、人生には捨てる勇気が大事だ。決断するということは捨てることなんだ。捨てる勇気のない人間は人生において集中力を発揮できない。だから自分の底力は湧いてこないんだ。人生の最大の要諦、人生最大の肝心要のカンカン肝臓は、どこなのかといったら、決断じゃない。どの道を選び取るかが、人生によっては一番大事なことじゃないんだ。人生における要諦は、最大の要諦は、最大の眼目は、自分が決断し、選び取った道から出てくる問題を乗り越える努力をするか、逃げるか、それだけが人生の要諦である。どの道を選び取るかに人生最大の問題があるんじゃない。だけども、賭けるためには、最高の道を選び取ったという自覚がなければならない。でなければ賭けられない。だから、よく考えて、よし、この道でいこうと思わなければならない。そのためには、よく考えなければならない。だけども、選び取った限りは迷ったらいかん。もうばかになって、一本道をまっしぐらに進んでいく。それが人生だ。そして、最大の人生の要諦は、今、自分が選び取った道から出てくる問題を乗り越えるか、向かっていくか、逃げるか。それだけが人生だ。問題の出てこない道はない。悩みの出てこない道はない。**

**人生は決断にあるんじゃない。問題を乗り越えるかどうか。逃げるか向かっていくか。それだけが人生の最大の要諦だ。だから、人生は賭けなんだ。賭けるというこの気迫。それがなかったならば、人生には迷いが生じてくる。自分が大人物になれるかどうか。自分が大きな仕事ができるかどうか。それは何が決めるのかといったら、大きな問題が出てくるかどうかなんですよ。ちっちゃな問題意識しか出てこなければ、小人物で終わってしまう。大人物というのは、みんな大きな問題を乗り越えた人間なんだ。自分を大人物にしてくれるか、小人物で終わらせるか。それは問題が決定するんだ。例え、その決断があまり、十分に考えられなかった決断で、半端な決断で、あまりよくない道を選んでしまってね、失敗だなと思った人生であったとしても、そこから出てくる問題が大きければ、大きな問題を乗り越えれば、人間は大人物になるんですよ。それだけ大きな能力が出てくるんですからね。とんでもない、普通の人間は逃げてしまうような、とてもかなわんというような問題を乗り越えれば、相当な大きな能力が出てきます。大人物になってしまうんですよ。**

**人間が大人物になるか、小人物で終わるかは問題が決めてくれるのであって、自分が決めるんじゃない。問題が人物をつくるんだ。大人物は大きな問題を乗り越えた人間だけなんだ。だから、自分の予想だにもしないね、大きな困難、大きな苦難、大きな問題が出てきたならばね、そのときがチャンスだ。大きな問題、とんでもない問題が出てきたらね、俺を大人物にしようってかと思って、てか、てかと思って、テカりながら、まっしぐらに向かっていかないかんと。逃げたらいかんと。大きな問題こそ、まさに自分を大人物にするね、チャンスが自分に与えられたんだと思うぐらいでなかったらいかん。ちっちゃな問題しかなかったら、もう平凡な人間で終わってしまう。実際問題、人間の値打ちというのはすごいもんですからね。顔が違うということは、どんな人間でもみんな、他人にはできん何かができる。俺にしかできんことがある。それが顔の違いの証明、顔の違いが言い表しておる事実ですからね。顔はもうすでにオンリーワンだ。世界一だ。その自分の顔にふさわしい能力を発揮したならば、誰でも世界一になれる。ナンバーワンかオンリーワンか、どちらかになれる。俺にしかできんことがあるんだ。**

**とにかく、そういうこの思いを持ってね、人生、迷ったらいかん。ある道を選び取ったならば、どんな問題が出てこようと、俺に任しとけ。俺が選んだ道やないか。どんなことが出てきたって、俺がなんとかしたる。その一本道がね、まさに自分の幸せの道なんですよ。それが人生の本道なんですよ。どの道を選び取るかに人生の眼目があるんじゃない。選び取った道から出てくる問題を乗り越えるか、逃げるか。それだけが人生の大問題だ。ほかのものはもうどうでもいい。とにかく人生は賭けだ。賭けるということは、捨てる勇気が大事なんだ。捨てる勇気のない人間は、迷いの人生を歩まざるを得ない。結局、人生に悔いを残さざるを得ない。悔いを残さない人生は、捨てる勇気を持って決断することによって生まれてくる。決めたらもう迷ったらいかん。それが不完全な人間がね、悔いを残さない人生をつくる方法なんですよ。不完全だから、ついつい悔いは出てくる。だけど、悔いのない人生というものを本当に歩んでいこうと思ったら、不完全なるが故に決断しなければならない。そして、あるものを選んだら、もう迷ったらいかん。まっしぐらに一本道を進んでいく。どんな問題が出てきたって乗り越えていこうとする。その気迫が、その気持ちが、自分に幸せを与えてくれる。もうそれしかないんです、人生は。決断に賭けるっきゃない。**

**最後、５番目ですね。最後、５番目はですね、意味と価値の確認。本当に自分の、人生に充実感というものをつくっていこうと思ったならば、意味の感じられないようなことをやったらいかん。やっぱり、意味と価値を確認しながら、今、自分のやってることはこんなに素晴らしいことなんや。こんなすごいことなんや。今、自分のやってることの意味と価値と素晴らしさを確認しながらね、毎日毎日を生きるということをしていくことが、素晴らしい人生、納得のできる人生、悔いのない人生をつくっていく基本である。だけど、ついつい人生は惰性に流される。単に仕事があるからやってるという、そういう状態で生きてる人がほとんどだ。今、自分のやってることがこんなに素晴らしいことだ。こんな価値や値打ちがあるんだということを、意識しながら、意味を感じながら、仕事をしてるという人は非常に少ない。それが喜びのない人生、それが成長のない人生、不幸な人生をつくる方法なんだ。意味を感じれば、必然的に人間はその瞬間に幸せになるんだ。一瞬一瞬が幸せになるんだ。それは意味を感じるということだ。**

**なぜならば、人間の心は意味と価値を感じる感性だ。意味を感じれば、価値を感じなければ人間は幸せにならない。幸せは意味と価値を感じるところから生まれてくるんだ。意味のないことをやったらいかん。価値のないことをやったらいかん。意味を感じながら、価値を感じながら、素晴らしさを感じながら生きるところに幸せという実感が生まれてくる。惰性に流されてはならない。今、自分のやってることに意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じながら生きる。それが人生の基本だ。人間は意味を感じなかったらやる気にならない。価値や素晴らしさを感じなかったら命は燃えてこない。喜びがないんだ、人生に。だから、どんなことにもね、意味のない仕事はない。価値のない仕事はない。どんなことにも必ず重大な社会的な意味があるし、また重要な、価値が人生に皆あって、存在しておる仕事である。どれほどの意味や価値や値打ちや素晴らしさを、今、自分がやってるその瞬間の、そのことにね、自分が発見するか。それが自分を幸せにする原理だ。今、自分のやってることに意味と価値と値打ちと素晴らしさを発見できなければ、感じることができなければ、その瞬間、自分は不幸だ。結局、意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じる感性が自分に幸せをもたらせてくれる。意味のないことをやったらいかん。その意味を感じながらやらないかん。**

**だから、毎朝毎朝の会社の朝礼はね、俺たちがやってることはこんなすごいことなんだ。こんな素晴らしいことなんだ。こんな意味や価値や値打ちや素晴らしさがあるんだ。こんなすごいことをやってんだぞ。さあ、やろうといって、仕事が始まる。それが朝礼だ。毎朝毎朝の朝礼が単に社訓を読み、社史を読み、企業理念を読んで、はい終わりじゃ、全然何もならない。朝礼とは、やる気をつくる、この儀式ですからね。自分たちのやってることの意味と価値と値打ちと素晴らしさを共感し合って、さあ、やろうという、その気迫が、まず朝礼になかったらいかん。会社に一番大事なのは燃える言葉だ。その言葉を見ただけで燃える。聞いただけで燃える。命を燃やす言葉こそね、人生の宝だ。その言葉が会社には貼ってないといかん。理性でつくった冷ややかな標語じゃ、やる気が出てこない。言葉には魂が必要である。言葉は人間を動かすためにあるんだ。燃える言葉、それが会社の、理念というか、標語になってないといかんと。**

**プロというのは、今、自分のやってる仕事の本当の素晴らしさを情熱を持って語れるというのがプロだ。金を持って、金をもらって仕事をしてる限りはね、今、自分のやってる仕事の本当の素晴らしさがわかってないといかん。語れないといかん。でなきゃ、申し訳がない。金はもらえない。本当の素晴らしさを感じてないで、なんでプロだと。プロというのは、今、自分のやってることの本当の素晴らしさが情熱を持って語れる。この仕事の素晴らしさを一番よく知ってるのは俺だと言えて、プロだ。そういう自分を、磨いていこうというふうに、考えながら仕事をしてなきゃいかん。この仕事の素晴らしさがどこにあるのかということを探り求めながら仕事をすることがプロだ。その仕事の本当の素晴らしさを自分が他の人に教えることができてプロだ。金がもらえる。値打ちがあるということだ。とにかく意味のない人生ではいけない。意味のないことをやったらいかん。意味と価値を感じなければ、幸せ、充実感というのは湧いてこない。意味を感じ、値打ちを感じ、素晴らしさを感じたら、瞬間に人間は幸せになる。自分を幸せにする原理はそこにあるんだ。**

**何をしてるときにも、常にいい意味を感じ、値打ちを感じ、素晴らしさを感じておったならば、自分は常に幸せだ。人間の本質は心である。心とは意味と価値を感じる感性だ。意味と価値を感じなければ、人間の幸せはやってこない。だからこそ、あらゆるものに意味と価値を発見する力こそね、自分を幸せにする原理だ。あらゆるものに意味と価値をつくりだすことによって、自分が幸せを創造できる。自分が幸せをつくることができる。それが幸せをつくる実力だ。どんなことにも、マイナスがあり、プラスがある。マイナス面に気を奪われてはならない。そのことのプラスの面を自分は見抜いて、取り出して、それを感じる力、それが意味と価値と値打ちと素晴らしさをつくっていく原理だ。あらゆることに素晴らしさがある。あらゆることに意味と価値と値打ちがある。それをどれだけ自分が感じられるか。その意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じることができる度合いに応じて、自分の幸せ度は決定する。意味のない人生を生きてはならない。価値のないことをやったらいかん。常に意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じながら、まずそれをつくりだしながら、意味を感じて生きる。それが人間の人生だ。**

**とにかくわれわれが、自分の人生を悔いのない、本当にこの幸せと言える、成功と言える、納得のできる人生にしていこうと思ったならば、その鉄則、原則としてね、今、申し上げたことだけは基本的に、この頭の中に置いておかなければならない。これ、全部やろうと思うと大変ですからね。だから、これを意識に置きながらね、何かしら問題があったならば、どの原則に外れておるからこういう問題が出てきてるんだろうか。自分の人生の軌道修正のためにね、原則を使ってもらいたいと思います。とにかく、人生の舞台は社会だ。社会において一番要求されるのは、他人から信頼され、信用されることである。他の人から信頼され、信用されるということでなかったならばね、仕事においても成功しない。家庭においても幸せを築けない。信頼され、信用される人間になろうとしなければ、自分は不幸になってしまう。信頼され、信用されることが、信じる目で見られることが、自分が幸せなんだ。不信の目で、疑いの目で見られるほど悲しいことはない。信頼、信用はそれほど大事だと。人間が生きる基本は信じるということだ。何者も信じられなくなったとき、人間は自ら命を絶つのである。不信の目は殺す目である。信じる目は生かす目だ。**

**あらゆるものにいいところをね、見いだしてあげることができるような、そういう目を持たなければならない。相手のあら探しをして、悪いところしか見えないようなね、そういう目は自分自身も不幸な目だ。気分が悪い。また、そういう目で見られたら、相手も嫌だ。あらゆるもののいいところを見つめることができるような目をわれわれは持たなければならない。実際問題、こうやって、皆さん方のお顔をこうやって拝見しておったら、一人ひとりね、本当にものすごい独特の個性があってね、この人をドラマの主役にしたら、どんなドラマがつくれるだろうかと思うぐらいね、みんなこう、主役としてのものすごいスターとしてのね、輝きを顔が持ってるんですよ。その存在感のある顔にふさわしいね、内容を持ったならば、どんな素晴らしい人生が見えるだろう。どんな素晴らしい人生になるだろう。私のこの立場から皆さん方のね、お顔を見てると、一人ひとりのその顔の中に素晴らしい人生が見えるんですよ。ぜひ、その顔にふさわしい、素晴らしい人生をね、実現してもらいたい。自分だけの人生をぜひものにしてもらいたい。**

**だから、惰性に流されたらいかん。自分の人生をつくっていかないかん。そのために、自分で自分を教育するということをね、ぜひ考えてもらいたい。俺の人生をつくるんだと。そのためには、自分の人生の未来に命から湧いてくる理想を掲げなければならない。目標を掲げなければならない。燃える目標がなかったならば、俺の人生はつくれない。何を目指して生きるのか。それがものすごい大事な人生の生き切る基本なんですよね。目標のない人生は自分のない人生だ。真っ赤に燃える素晴らしい理想というものを、常に心に抱きながら、その目的を実現するために今の一瞬を生きるというね、そういうこの生き様というものをぜひ持ってもらいたい。そしたら、みんなの命は輝きますよ、本当に。お一人お一人の顔の中にね、素晴らしい人生が見える。みんな他に置き換えがたい、素晴らしい個性あるね、本当にこう、感動するドラマを持った人生というものをみんな感じるんですよ。**

**ぜひ、そのために限界への挑戦、逃げたらいかんという気持ちで、目の前の問題に挑んでもらいたいし、また人生は賭けだ、迷ったらいかん。一本道をまっしぐらに進んでいく。そういう吹っ切れた人生を歩んでもらいたいし、あらゆることに意味と価値と値打ちと素晴らしさを発見できるような目を持ってね、自分だけが幸せになるんじゃなくって、そのあらゆるものの意味と価値と値打ちと素晴らしさを発見する目を持って人を幸せにする。そういう人生をぜひつくってもらいたいと思います。とにかく今日は人生の鉄則ということで、自分自身が、自分自身の人生を成功へと、幸せへと持っていく、基本的な原理をお話させてもらいました。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**